

しか べ  
鹿部町

おお いわ  
大岩5遺跡

- 一般国道278号鹿部道路（鹿部バイパス）工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成15年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1. 遺跡遠景（南東から）



2. 調査風景（北から）



口絵 2



1 . 遺跡全景（西から）





II層 (Ko-a)

III層

IV層 (Ko-d)

V層 (B-Tm)

VI層

VII層 (Ko-f)

VIII層

IX層 (Ko-g)

X層

XI層

XII層 (Ng)

1 . 基本土層



# 例 言

- 1．本書は国土交通省北海道開発局函館建設部が行う一般国道278号鹿部道路（鹿部バイパス）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成15年度に実施した鹿部町大岩5遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
- 2．調査は、第1調査部第4調査課が担当した。
- 3．遺物の整理、本書の執筆・編集は、福井淳一が担当した。写真撮影は、笠原 興が担当した。
- 4．石器の石材鑑定は、第1調査部第1調査課花岡正光の指導のもと福井淳一が行った。
- 5．報告書刊行後、出土資料及び記録類は鹿部町教育委員会が保管する。
- 6．調査にあたっては下記の諸機関、諸氏にご協力、ご指導を頂いた。（順不同・敬称略）

鹿部町教育委員会、南茅部町教育委員会 阿部千春、福田裕二、森町教育委員会 藤田 登、荻野幸男、佐藤 稔、本山志郎、八重柏 誠、山田あや子、鎌田しのぶ、渡部明美、八雲町教育委員会、八雲町郷土資料館 三浦孝一、柴田信一、吉田 力、七飯町教育委員会 石本省三、山田 央、函館市教育委員会 田村良信、野村祐一、市立函館博物館 長谷部一弘、市立函館博物館五稜郭分館 佐藤智雄、上磯町教育委員会 森 靖裕、安西雅希、厚沢部町教育委員会 石井淳平、木古内町教育委員会 菅野文二、大谷内愛史、木元豊、三上英則、知内町教育委員会 高橋豊彦、松前町教育委員会 久保 泰、前田正憲、谷岡康孝、天方博章、竹内友香、福島町教育委員会 小柳リラコ、上ノ国町教育委員会 齊藤邦典、松崎水穂、今金町教育委員会 寺崎康史、宮本雅通、乙部町教育委員会 森 広樹、藤田 巧、戸井町教育委員会 鈴木正語、奥尻町教育委員会 木村鉄朗、虻田町教育委員会 角田隆志、伊達市教育委員会 大島直行、青野友哉、菅野修広、泊村教育委員会 田名部 淳、岩内町教育委員会 野辺地初雄、苫小牧市博物館 赤石慎三、苫小牧市 工藤 肇、厚真町教育委員会 乾 哲也、小野哲也、恵庭市教育委員会 上屋真一、松谷純一、森 秀之、平取町教育委員会 森岡健治、長田佳宏、余市町教育委員会 乾 芳宏、浦幌町教育委員会 後藤秀彦、青森県教育委員会 神 康雄・坂本真弓、青森市教育委員会 児玉大成、森田村教育委員会 佐野忠史、秋田県埋蔵文化財センター 五十嵐一治、小島朋夏、鷹巣町教育委員会 奥山一絵、函館大学 竹花和晴、北海道考古学研究所 横山英介、南茅部町埋蔵文化財調査団 坪井睦美、小林貢、輪島慎二、野月寿彦、栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 吉田哲、藤田直也、北海道開拓記念館 山田悟郎、小林幸雄、平川善祥、右代啓視、鈴木 琢、北海道教育庁文化課、国際縄文学会 関俊彦



# 凡 例

1．土層名は下記の記号を用いた場合がある

Ko-a：駒ヶ岳 a 降下軽石層

Ko-d：駒ヶ岳 d 降下軽石層

B-Tm：白頭山苦小牧テフラ

Ko-f：駒ヶ岳 f 降下軽石層

Ko-g：駒ヶ岳 g 降下軽石層

Ng：濁川テフラ

火山灰の略記号は、町田洋・新井房夫（2003）『新編 火山灰アトラス』（東京大学出版会）にならった。

2．実測図と土器拓影図の縮尺は、スケールなどが入っているもの以外は原則として以下のとおりである。

土器・礫石器：3分の1 剥片石器・磨製石斧：2分の1

3．土器・石器の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。石器は、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。なお、実測図中でたたき痕は - 、すり痕は で範囲を表した。



# 目 次

口絵カラー

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

図版目次

## I 調査の概要

1 調査要項 .....	1
2 調査体制 .....	1
3 調査に至る経緯 .....	1
4 調査の概要 .....	1

## II 調査の方法

1 発掘区の設定 .....	5
2 発掘調査の方法と経過 .....	5
3 整理の方法 .....	6
4 基本層序 .....	6
5 遺物の分類 .....	9

## III 遺跡の位置と環境

1 位置と環境 .....	13
2 周辺の遺跡 .....	18

## IV 包含層出土の遺物

1 概要 .....	23
2 土器 .....	23
3 石器 .....	23
4 小結 - まとめにかえて - .....	25

付記 駒ヶ岳 f 降下軽石層と遺跡・遺物 .....

## V 自然科学的手法による分析結果

1 <sup>14</sup> C年代 .....	31
---------------------------	----

遺物一覧表 .....

引用参考文献 .....

写真図版

報告書抄録



# 挿図目次

I 調査の概要	図Ⅲ - 1 - 2 周辺の地形 ( 1 ).....16
図 I - 1 遺跡の位置 ..... 3	図Ⅲ - 1 - 3 周辺の地形 ( 2 ).....17
II 調査の方法	図Ⅲ - 2 - 1 周辺の遺跡 ( 1 ).....19
図Ⅱ - 1 - 1 発掘区設定図 ..... 4	図Ⅲ - 2 - 2 周辺の遺跡 ( 2 ).....20
図Ⅱ - 2 - 1 調査工程図 ..... 4	IV 包含層出土の遺物
図Ⅱ - 4 - 1 調査区V層上面地形図 ..... 4	図Ⅳ - 2 - 1 包含層出土の土器 .....26
図Ⅱ - 4 - 2 基本層序柱状図 .....11	図Ⅳ - 3 - 1 包含層出土の石器 ( 1 ).....27
図Ⅱ - 4 - 3 土層断面図 .....12	図Ⅳ - 3 - 2 包含層出土の石器 ( 2 ).....28
III 遺跡の位置と環境	図Ⅳ - 3 - 3 包含層出土の石器 ( 3 ).....29
図Ⅲ - 1 - 1 遺跡周辺の地形と調査区 ...15	図Ⅳ - 4 - 1 包含層出土遺物の分布 .....30

# 表目次

I 調査の概要	表Ⅳ - 2 - 1 包含層出土土器一覧 .....37
表 I - 4 - 1 出土遺物一覧 ..... 2	表Ⅳ - 3 - 1 包含層出土石器一覧 .....37
IV 包含層出土の遺物	表Ⅳ - 3 - 2 包含層出土礫一覧 .....37

# 図版目次

図版 1 1. 調査区全景 ( 北から )	3. K 105土層断面 ( 南東から )
2. 調査区全景 ( 北西から )	図版 5 1. 調査風景 ( 北東から )
図版 2 1. 調査区全景 ( 北西から )	2. X層検出状況 ( 北東から )
2. 調査風景 ( 西から )	3. X層礫出土状況 ( 北西から )
図版 3 1. 遺物出土状況 ( 西から )	4. X層遺物出土状況 ( 北東から )
2. 遺物出土状況 ( 南西から )	図版 6 1. 遺跡完掘 ( 北西から )
3. G 109 ~ L 109トレンチ ( 南から )	図版 7 1. 包含層出土の土器
4. K 111 ~ R 111トレンチ ( 南から )	図版 8 1. 包含層出土の石器 ( 1 )
図版 4 1. H 113土層断面 ( 南西から )	図版 9 1. 包含層出土の石器 ( 2 )
2. J 113土層断面 ( 南西から )	

# I 調査の概要

## 1 調査要項

事業名：一般国道278号鹿部道路工事（鹿部バイパス）

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所在地：茅部郡鹿部町字大岩107 - 18～20ほか

調査面積：1800m<sup>2</sup>

発掘期間：平成15年5月6日～平成15年7月25日

整理期間：平成15年11月14日～平成16年3月31日

調査員：笠原 興、福井淳一

## 2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長 森重 楯一

専務理事 宮崎 勝

常務理事 畑 宏明（第1調査部長兼務）

第4調査課長 遠藤 香澄

主任 笠原 興（発掘担当者）

主任 福井 淳一（発掘担当者）

## 3 調査に至る経緯

一般国道278号鹿部道路工事（鹿部バイパス）は、急カーブ、狭小幅員などの課題を抱える区間の整備、さらに駒ヶ岳の噴火時の緊急避難路としての機能及び道路防災点検要対策箇所解消と鹿部市街地の交通混雑の緩和を目的とした鹿部町大岩より鹿部町本別までの延長7.7kmの改築事業である。この事業に対する埋蔵文化財調査については平成13年8月29日付、函館開発建設部長から事前協議が提出された。協議を受けた北海道教育委員会により所在確認調査が平成13年9月21日に実施され、同年10月4日付で「6ヶ所の試掘が必要」である旨の回答がなされた。その後、試掘調査が平成14年4月9日～11日に行われ、フレイク1点、有意の礫（小台石？）1点が出土し、No.1地点のSP 900～1000において再度試掘調査が必要である旨の回答がなされた。再度の試掘調査は平成14年11月6日～7日に行われ、試掘坑1か所から縄文時代の土器片10点（同一個体）が出土。11月26日付で1,800m<sup>2</sup>の発掘調査が必要とされた。

## 4 調査の概要

遺跡は、鹿部町市街地の南西約3kmの海岸段丘上（標高約34m）に立地する。調査区南西側には常路（ところ）川が流れている。調査区周辺は昭和4年噴火の駒ヶ岳a降下軽石層に厚く覆われ、ほぼ平坦面となっている。発掘調査によって判明したことはあるが、更新世末期には調査区北西側に河川が存在したものとみられる。

土層には駒ヶ岳a降下軽石層、駒ヶ岳d降下軽石層、白頭山 苫小牧テフラ、駒ヶ岳f降下軽石層、駒ヶ岳g降下軽石層、濁川テフラなど多くの火山噴出物がみられ、それぞれの火山噴出物層の間には



黒色土が発達している。遺物は白頭山 - 苦小牧テフラの下位、駒ヶ岳 g 降下軽石層の下位の黒色土より出土した。ほかに、駒ヶ岳 g 火山灰下位のローム層中に土石流堆積物が確認された。

なお、鹿部町において今回が初の本格的な発掘調査である。同町では駒ヶ岳 a 降下軽石層をはじめ多くの火山噴出物が堆積している。周知の遺跡は5か所であるが、本遺跡以外はいずれも林道工事の際に確認されたものである。隣接する南茅部町同様多くの遺跡が火山噴出物の下に存在するものと考えられる。

調査では遺構は検出されなかったが、総数208点の遺物が出土した。その内訳は土器133点、石器36点、礫39点。土器は縄文時代前期円筒下層 d 式のもの、ほぼ1個体分で104点、続縄文時代恵山式のもの、ほぼ2個体分で29点ある。石器は石鏃、削器、つまみ付きナイフ、磨製石斧、すり石、たたき石などが縄文時代早期、縄文時代前期、続縄文時代恵山式期に相当する土層から出土している。

遺物の出土状況から判断すると、今回の調査地点は集落からやや離れた狩猟・採集の場であったと推定される。

遺物名	分類	層位										小計	
		VI	VIa	VIb	VII	X	Xa	Xb	X風倒木	X I	不明		
土器	Ⅲ群a類		4	100									104
	Ⅵ群a類		29										29
	小計		33	100									133
石器	石鏃			1									1
	つまみ付きナイフ								1				1
	削器		3	1									4
	両面調整石器						1						1
	Rフレイク		1				1						4
	剥片	1	8					2		1	1		11
	石核		2					1					3
	磨製石斧							1					1
	叩き石		3			2							5
	すり石		1	1		2							4
	台石											1	1
	小計	1	18	3		4	2	4	1	1	2		36
礫		22	8	6	3							39	
遺物総計		23	59	109	3	4	2	4	1	1	2	208	

表 I - 4 - 1 遺物出土一覧

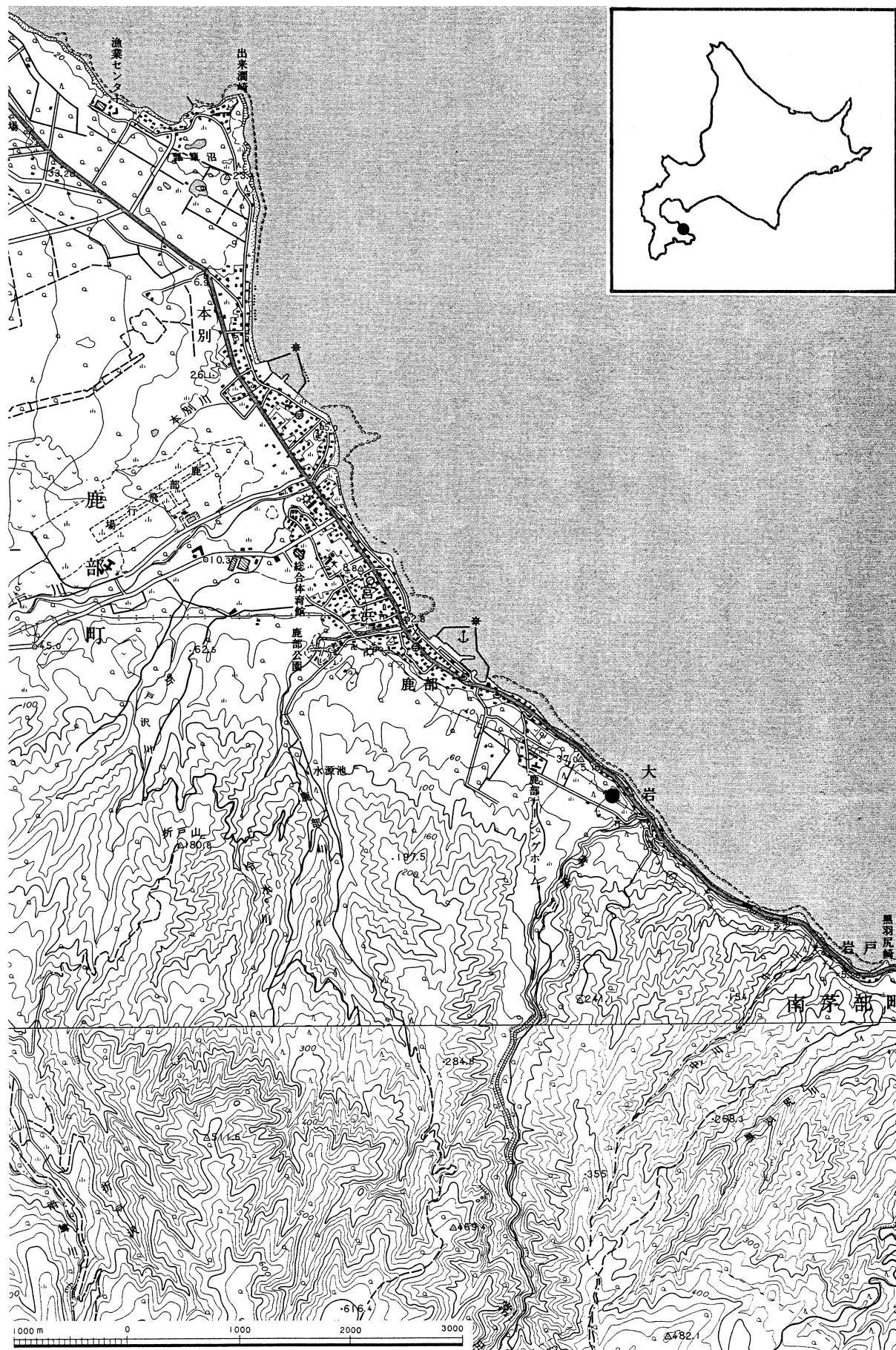


図 I - 1 遺跡の位置

(この図は国土地理院発行の5万分の1地形図「鹿部」(平成9年発行)・「白尻」(平成15年発行)を複製したものである。)



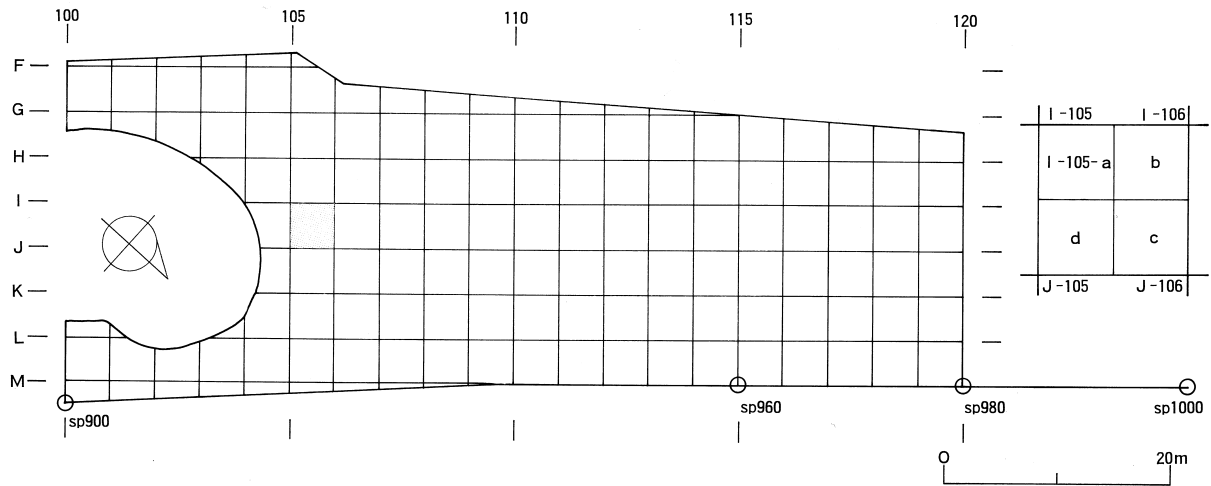


図 II - 1 - 1 発掘区設定図

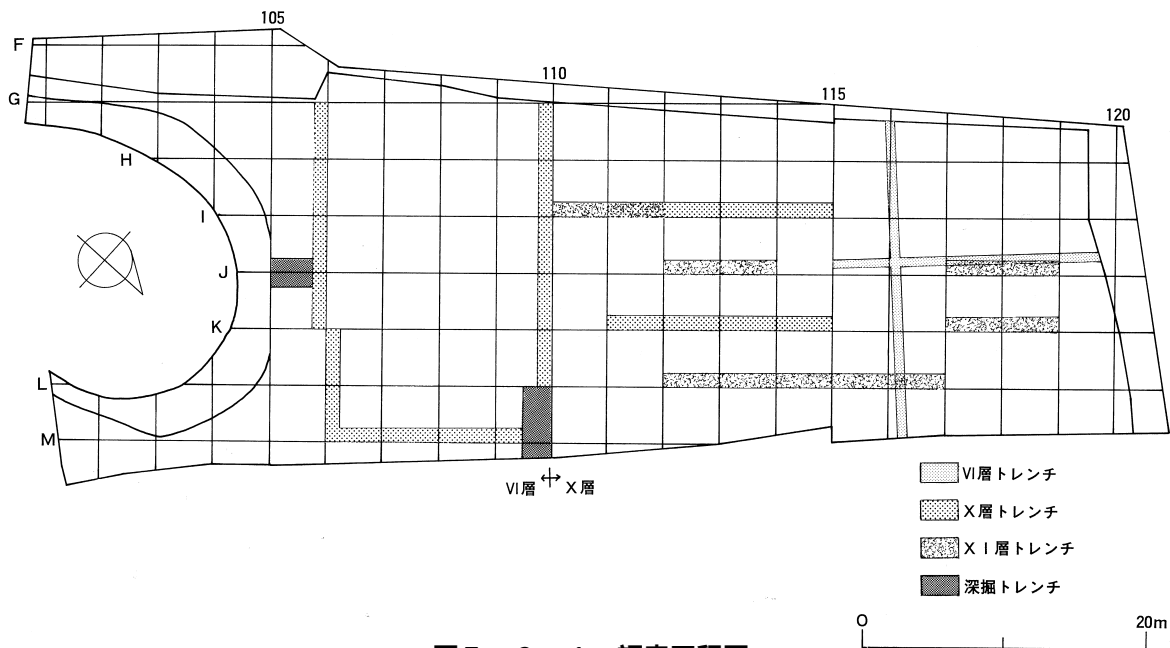


図 II - 2 - 1 調査工程図

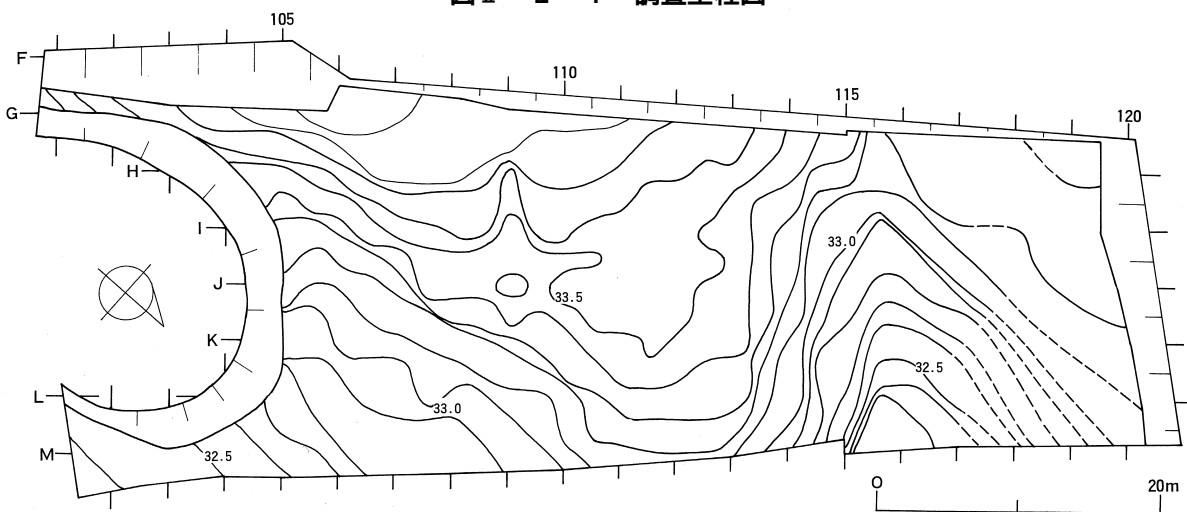


図 II - 4 - 1 調査区V層上面地形図

## Ⅱ 調査の方法

### 1 発掘区の設定

発掘区の設定は、工事区予定中央線上の中心杭 S P 980と S P .1000を結んだ線を基準の Mラインとし、Mラインから 4 m毎に南西側を L、K、J...とした。さらに S P 960を通り、Mラインに直交する線を 115ラインとし、それより南東側を 4 mごとに 114、113、112...とした。発掘区はこの 4 m方眼を基準に、その北側の交点(図では左上)のアルファベットと数字の組合せでグリッドの名称とした。また、調査の必要に応じて 2 m方眼に分割し、遺物の取上げを行った。ここではグリッドの基準(南西角)から時計回りに a、b、c、dとした。

なお、この方眼の座標系は改訂前の座標系「日本測地系」、標高値については改訂前の標高成果「公共水準成果」にて測量が実施されている。平面直角座標は第 X I系で以下のとおりである。

S P 960 (調査区 M - 115) X = - 219962 3150 Y = + 49371 9700

S P 980 (調査区 M - 120) X = - 219947 3652 Y = + 49358 6845

### 2 発掘調査の方法と経過

発掘調査に先行し重機により表土～駒ヶ岳 d 降下軽石層の除去を行い、調査区の設定杭を打設した。4 m方眼の基準杭の設定は業者に委託した。

調査はグリッド単位に行い、まず遺物の分布状況を把握するために調査区の 4 分の 1 を調査するように千鳥に H - 105・107・109・111・113、J - 105・107・109・111・113、L - 107・109・111・113 を VI b 層まで掘り下げた。その結果、試掘調査では確認されなかった縄文時代恵山式土器のほか、石器や礫が散漫に出土した。

試掘調査では縄文時代後期? とされる土器が確認されていたが、同時期の遺物が出土しないため Lラインと 105ラインをさらに VI b 層まで掘り下げた。その過程で同ラインに沿うように試掘溝を 1 m幅で掘り、さらに下位の層位を確認した。試掘調査では、重機による掘削の限界と崩落による危険防止のため IX 層までの掘削であったが、過去の地質図などを参考にした結果さらに下位に黒色土の存在が考えられたため、一部掘り下げることとした。その結果、層厚約 20cm の黒色土が確認されたため、試掘溝を 110ライン、H - 111～115、J - 111～115 に追加設定して遺物の確認を行った。その結果、Iラインの試掘溝で剥片 2 点と石核 1 点が出土し、I - 115 では礫の集中が確認された。そこで、115ラインより 120ラインまでを拡張し、110ラインから 120ラインについて X 層の調査を行うことにした。

拡張部分については、重機によりまず表土～駒ヶ岳 d 降下軽石層まで除去し、地形測量及び Jラインと 115ラインに沿うように V・VI 層黒色土のトレンチ調査を行った。その後拡張部分を含む 110ライン～120ラインについて駒ヶ岳 g 降下軽石層まで重機により除去し、拡張区の 4 分の 1 にあたる H - 111・113・115・117・119、J 111・113・115・117・119、L - 111・113・115・117・119 を掘り下げた。その結果、非常に散漫であるが遺物が出土すること、G - 113～L - 116 より北西側では多量の礫がみられることが判明し、残り 4 分の 3 について調査することにした。また当初計画部分の 100ライン～110ラインについては、VI 層黒色土までの調査とした。

最終的に礫の堆積要因を明らかにするために I - 110～112、J - 112～114・117～119、L - 112～117 について X I 層ロームのトレンチ調査を行った。その結果、礫を含む堆積物が、X 層黒色土下位に堆積しており、かつその下位の濁川火山灰を侵食していることなどから、土石流堆積物と判定した。



なお、調査区内南東側に高圧電柱があり、調査時に撤去未了であったためその部分については来年度以降の調査も考えられた。しかし、ここまでの調査の結果から判断して、その部分の調査は不必要であると考えられたことから、拡張部と面積を相殺し合計1800m<sup>2</sup>の調査となった。

### 3 整理の方法

現地では、遺物の取上げは、基本的に2m方眼の小発掘区で層位ごとに取り上げた。遺物取上げ後、水洗・注記し、大まかな分類をした後、遺物台帳を作成した。遺物台帳は下書き後、マイクロソフトエクセルに入力し、集計した。なお、注記は、「大岩5遺跡」を「O I 5」と略し、以下のようにした。

O I 5 (層位) (グリッド) (遺物番号)

冬季の室内整理作業では、台帳の補正、土器の接合作業、剥片類の接合作業、遺物の実測及び作図、集計、記録類の整理を行った。

土器については分類の見直しを行い、接合を行った。接合にあたっては同一固体の把握に努めた。石器については分類の見直し後、完形品を中心に器種や形態に隔たりのないよう代表的なものを選び出し実測した。また、長さ、幅、厚さ、重量を計測した。

収納については、報告書掲載のものは図版に対応するように1点ずつ収納した。それ以外についても1点ずつ収納した。

### 4 基本層序

大岩5遺跡の土層断面図を図Ⅱ-4-2及び図Ⅱ-4-3に示した。調査区は北東-南西方向に緩やかに傾斜しており、また浅い沢が入る。土層の記載は、『土壤調査ハンドブック改訂版』(日本ペドロジー学会編2000)を参考にし、土色、土性、粘着性、堅密度、含有物とその含有率について記載した。土色については『新版標準土色帖』(小山・竹原2002)を用いた。

**I層 表土**：暗赤褐色。5Y R 3/4。砂土。粘着性弱。堅密度しょう。粒径小の軽石50%以上含む。かつての畑地が放棄されたもの。

**Ⅱ層 駒ヶ岳a降下軽石層(Ko-a)**：粒径中～極大主体で乾燥すると白くなる軽石層。遊離結晶として輝石・長石を多く含む。地点により人為による削平や、二次堆積している部分がある。軽石の粒径により二分した。昭和4(1929)年噴火。

Ⅱa層：にぶい黄橙色。10Y R 7/4。粒径大・極大主体の軽石層。遊離結晶として輝石・長石を多く含むが、粒径中の軽石も多い。

Ⅱb層：にぶい黄橙色。10Y R 7/2。粒径中・大主体の軽石層。遊離結晶として輝石・長石を多く含む。

**Ⅲ層 クロボク土**：黒色の腐植土。10Y R 2/1。色調はやや褐色がかかる。埴土。粘着性弱。堅密度軟。Ko-d軽石粒5%含む。下部2cmは下位層と漸移的。地点によりⅡ層を削平し、この層位を耕作土とする。

**Ⅳ層 駒ヶ岳d降下軽石層(Ko-d)**：粒径極小で黄橙色の軽石層。岩片の含有多い。軽石の粒径や岩片の含有量により三分した。寛永17(1640)年噴火。

Ⅳa層：にぶい黄橙色。10Y R 4/3。砂土。粘着性弱。堅密度軟。細粒火山灰。軽石少なく、岩片多い。上位層と漸移的。層厚約3cm。

Ⅳb層：にぶい黄橙色。10Y R 5/4。砂壤土。粘着性弱。堅密度しょう。細粒火山灰。粒径極小の軽石と岩片半々。層厚約1cm。

- IV c 層：褐色。10Y R 4 / 6。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶるしょう。粒径極小の軽石層。軽石と岩片半々。層厚約15cm。
- V 層 **クロボク土**：暗褐色の腐植土。中位に白頭山苦小牧火山灰をレンズ状に挟む。
- V a 層：暗褐色。10Y R 3 / 3。砂壤土。粘着性中。堅密度堅。極小鉱物 3 % 含む。細粒で火山灰質。白頭山苦小牧火山灰が拡散している。V a ' は粒径大～極大の軽石 3 % 含むもの。
- V b 層：白頭山苦小牧テフラ (B-Tm) にぶい黄褐色。10Y R 5 / 4。砂土。粘着性弱。堅密度軟。細粒火山灰。10世紀中頃の降下とされる (町田ほか2003)。
- VI 層 **クロボク土**：黒色の腐植土。色調と軽石の含有量で二分した。
- VI a 層：黒色。10Y R 1 .7 / 1。砂壤土。粘着性弱。堅密度軟。粒径大～極大の軽石 5 % 含む。**縄文時代恵山式期の包含層。**
- VI b 層：黒色。10Y R 1 .7 / 1。VI a よりやや褐色。壤土。粘着性弱。堅密度軟。粒径大～極大の軽石 30% 含む。**縄文時代前期の包含層。**
- VII 層 **駒ヶ岳 f 降下軽石層 (Ko-f)**：赤褐色の軽石層で、土壌化の差により二分した。なお、噴出年代は奥野ほか (1999) によると<sup>14</sup>C年代は約5,500 y .B .P とされる。
- VII a 層：黒褐色。10Y R 2 / 2。壤土。粘着性弱。堅密度軟。粒径中～極大の軽石層。マトリックに粒径極小以下の軽石 7 %。上位層と漸移的。
- VII b 層：暗褐色。10Y R 3 / 4。壤土。粘着性弱。堅密度しょう。粒径中～極大の軽石層。マトリックに粒径極小の軽石多量。
- VIII 層 **クロボク土**：黒色の腐植土。色調と軽石の含有量で三分した。
- VIII a 層：黒褐色。10Y R 3 / 2。壤土。粘着性弱。堅密度すこぶる堅。粒径中～極大の軽石 50% 以上含む。
- VIII b 層：黒褐色。10Y R 3 / 2。壤土。粘着性弱。堅密度すこぶる堅。粒径極小の軽石 25% 含む。
- VIII c 層：灰黄褐色。10Y R 4 / 2。砂壤土。粘着性弱。堅密度すこぶる堅。粒径極小の軽石 50% 以上含む。下位層と漸移的。
- IX 層 **駒ヶ岳 g 降下軽石層 (Ko-g)**：上部の粒径小で黄灰白色の軽石層と下部の黄褐色の細粒火山灰層からなる。軽石は輝石を含む。軽石の粒径、色調などで細分した。噴出年代は<sup>14</sup>C年代で6,600～5,800 y .B .P とされる (奥野ほか1999)。
- IX a 層：オリーブ褐色。2.5Y 4 / 3。砂土。粘着性弱。堅密度すこぶる堅。粒径極小の軽石層。上位層と漸移的。部分的にIX b 層を貫くが、X 層当時繁茂していた樹木の痕跡とみられる。
- IX b 層：オリーブ褐色。2.5Y 4 / 4。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶる堅。粒径極小～小主体の軽石層。粒径によりさらに三分される。
- IX b 1 層：粒径中は稀。層厚約13cm。
- IX b 2 層：粒径中の火山礫も多い。層厚約16cm。
- IX b 3 層：下部に粒径中の火山礫多い。層厚約13cm。
- IX c 層：明黄褐色。10Y R 6 / 6。砂土。粘着性弱。堅密度すこぶる堅。中位に 2～6 cm の b 層を挟み、上部のIX c 1 層と下部のIX c 2 層に分かれる。下部は色調と岩片の含有量でさらに4層に分けられる。下部の層界は波打つが、インポリューションとみられる部分と、根によるとみられる部分がある。
- IX c 1 層：層厚約 1～2 cm。
- IX c 2 層：層厚約 6 cm。
- IX c 2 層 - 1：粒径小の軽石主体。粒径極小の岩片 3 % 含む。層厚約 2 cm。

IX c 2層 - 2 : 粒径極小の岩片 1 %以下含む。断面では肉眼で確認できないほどの粒径。  
層厚約 2 cm。

IX c 2層 - 3 : 粒径小の軽石主体。粒径極小の岩片 7 %含む。にぶい褐色(7 5Y R 5 / 4 )  
を呈する。層厚約1.5cm。

IX c 2層 - 4 : 細粒の軽石と砂が半々。層厚約0.5cm。

**X層 クロボク土** : 黒色の腐植土。色調と軽石の含有量で三分した。

X a層 : 黒色。10Y R 1.7 / 1。埴壤土。粘着性中。堅密度軟。粒径小～極小の軽石 3 %含む。上  
部 2 ~ 3 cmが極暗褐色(7 5Y R 2 / 3 )。

X b層 : 黒褐色。10Y R 3 / 2。埴壤土。粘着性弱。堅密度軟。粒径中～極小の軽石 7 %含む。上  
下層よりやや褐色。軽石は角閃石含み、濁川テフラ起源とみられる。**縄文時代早期の包  
含層**。I - 115付近の X b ' は粒径小～極小の軽石 1 %含む。

X c層 : 黒褐色。10Y R 3 / 1。埴土。粘着性弱。堅密度軟としようの間。粒径中～極小の軽石 5  
%含む。軽石は X b層と同じ。

**X I層 ローム層** : 黄褐色土層。色調と堅密度で三分した。

X I a層 : **漸移層**。にぶい黄褐色。10Y R 4 / 3。埴土。粘着性弱。堅密度軟。粒径中～極小の軽  
石10%含む。軽石は角閃石含み、濁川テフラ起源とみられる。

X I b層 : **ローム層**。黄褐色。10Y R 5 / 6。埴土。粘着性中。堅密度軟。粒度小の岩片 3 %含む。  
層厚約10cm。

X I c層 : **ローム層**。明黄褐色。10Y R 6 / 6。埴土。粘着性弱。堅密度堅。粒度小～中の軽石・  
岩片 5 %含む。層厚約10cm。

このほか、X I層中では**土石流堆積物**とみられるものが確認された。層位はX I b層に相当し、や  
や黄色味の強い黄褐色を呈する。直径 5 mm以下の濁川テフラ起源の軽石、岩片、各種サイズの礫を多  
数含む。濁川テフラ起源の砂質土が層状に堆積する部分も見られた。礫の堆積は、H - 115 ~ L - 116  
の沢に沿うように、H - 113 ~ L - 116を結ぶ線より北西側に見られる(図IV - 4 - 1 X層遺物分布参  
照)。L - 114 ~ 115ではX II層を切って堆積している様子が確認された。

**X II層 濁川テフラ (Ng)** : 上部のオレンジ色で粒径中～大の軽石層と下部の青色ないし黄褐色で、  
ラミナが発達する層からなる。軽石は角閃石を含む。軽石の粒径、色調などで細分した。砂  
土は粗粒火山灰、砂壤土～埴壤土は細粒火山灰。噴出年代は<sup>14</sup>C年代で約12,000y .B .Pとさ  
れる(柳井ほか1992)。

X II a層 : にぶい黄色。2.5Y 6 / 4。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶる堅。粒径中主体の軽石層。

X II b層 : 明黄褐色。10Y R 6 / 8。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶる堅。粒径大主体の軽石層。

X II c層 : オリーブ灰色。2.5GY 6 / 1。砂土。上部 5 mmは砂壤土。粘着性なし。堅密度すこぶる堅。

X II d層 : オリーブ黄色。5Y 6 / 3。砂壤土。粘着性なし。堅密度すこぶる堅。

X II e層 : オリーブ灰色。2.5GY 6 / 1。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶる堅。

X II f層 : 浅黄色。2.5Y 7 / 4。埴壤土。粘着性弱。堅密度軟。

X II g層 : オリーブ灰色。2.5GY 6 / 1。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶる堅。

X II h層 : 褐灰色。7.5Y R 7 / 1。砂壤土。粘着性弱。堅密度すこぶる堅。

X II i層 : オリーブ灰色。2.5GY 6 / 1。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶる堅。

X II j層 : 褐灰色。7.5Y R 7 / 1。砂壤土。粘着性弱。堅密度すこぶる堅。

X II k層 : 緑灰色。7.5GY 6 / 1。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶる堅。



X II l 層：浅黄色。5 Y 7 / 3。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶる堅。

X II m 層：緑灰色。7 5 G Y 6 / 1。壤土。粘着性弱。堅密度軟。

X II n 層：灰白色。N 7 / 0。砂壤土。粘着性弱。堅密度すこぶる堅。

X II o 層：浅黄色。5 Y 7 / 3。壤土。粘着性弱。堅密度軟。

**X III 層 水成堆積物：**黄褐色のローム質土壌と砂質土壌の互層からなる。各層の層厚は定まらず、地点により偏差が大きい。軽石は輝石を僅かに含む。水を含み、かなり脆い。また砂層に多く含まれる。なお軽石は、円礫となっているため再堆積したものとみられる。礫は下部に多い。

X III a 層：明黄褐色。10 Y R 6 / 6。砂土。粘着性なし。堅密度軟。下部に粒径大の軽石が部分的に濃集。暗灰色（N 3 / 0）の砂挟む部分あり。

X III b 層：黄褐色。10 Y R 5 / 6。壤土。粘着性弱。堅密度軟。下部に粒径大の軽石 1 % 含む。

X III c 層：明黄褐色。10 Y R 6 / 6。砂土。粘着性なし。堅密度軟。

X III d 層：黄褐色。10 Y R 5 / 6。壤土。粘着性弱。堅密度軟。

X III e 層：明黄褐色。10 Y R 6 / 6。砂壤土。粘着性弱。堅密度軟。暗灰色（N 3 / 0）挟む。

X III f 層：黄褐色。10 Y R 5 / 6。壤土。粘着性弱。堅密度軟。

X III g 層：黄褐色。10 Y R 5 / 8。砂壤土。粘着性弱。堅密度軟。粒径中～人頭大の安山岩礫部分的に濃集。粒径中の軽石 3 % 含む。

X III h 層：オリーブ灰色。2 5 G Y 6 / 1。砂土。粘着性なし。堅密度堅。粒径中の軽石 5 % 含む。

X III i 層：明黄褐色。10 Y R 6 / 6。埴壤土。粘着性弱。堅密度軟。拳大の安山岩礫 7 % 含む。

**X IV 層 段丘礫層：**オリーブ灰色。5 G Y 6 / 1。砂土。粘着性なし。堅密度軟。径 5 cm～人頭大の安山岩礫 30% 含む。少数だが径 70 cm 以上の礫も含む。礫が多く、これより下位の掘削は困難。

なお、S P 860 L 8.8 m のボーリングデータでは、X IV 層は層厚 8.8 m あり、その下位に層厚 0.97 m の強風化礫岩、層厚 3.13 m の風化礫岩、基盤が白灰色の凝灰岩とされている。

このほか、部分的に見られた土層として以下のものがある。

- 1：色調は IX a 層に近いがやや暗色。性質は同じ。一部層界が細粒化するものもある。樹木根の攪乱。
- 2：色調は一定しないが、10 Y R 3 / 2 黒褐色を基本とする。その上下の層のブロックを含む。樹木根の攪乱。
- 3：X a 層と同じ色調。埴土。粘着性弱。堅密度すこぶる堅。樹木根の攪乱。
- 4：10 Y R 2 / 3。黒褐色。埴土。粘着性弱。堅密度堅。粒度極小の軽石 15% 含む。樹木根の攪乱。
- 5：10 Y R 2 / 2。黒褐色土。砂壤土。粘着性弱。堅密度堅。粒径大～極大の軽石 15% 含む。VI b 層と VII 層の混土。
- 6：10 Y R 2 / 1。黒色。砂壤土。粘着性弱。堅密度堅。粒径極小の軽石 3 % 含む。V 層と VI a 層の混土。
- 7：10 Y R 1.7 / 1。黒色。埴土。粘着性弱。堅密度堅。粒径中の軽石 3 % 含む。VIII b 層に近い。
- 8：10 Y R 4 / 3。にぶい黄褐色。砂壤土。粘着性弱。堅密度堅。粒径極小の軽石 15% 含む。VIII c 層に近い。
- 9：2 5 Y 3 / 3。暗オリーブ褐色。砂土。粘着性なし。堅密度堅。IX 層に近い。

## 5 遺物の分類

### (1) 土器

分類については、本遺跡においては良好な出土状況のものはないことから、これまで渡島半島、噴

火湾～太平洋沿岸で発掘調査された成果に基づく分類を踏襲することとした。出土した土器は、縄文時代前期、続縄文時代がありそれぞれⅡ群、Ⅵ群とした。

**I群** 縄文時代早期に属するもの。(今回は出土していない)

**Ⅱ群** 縄文時代前期に属するもの。

a類 縄文尖底土器群。(今回は出土していない)

b類 円筒土器下層式に相当する土器群。

**Ⅲ群** 縄文時代中期に属するもの。(今回は出土していない)

**Ⅳ群** 縄文時代後期に属するもの。(今回は出土していない)

**V群** 縄文時代晩期に属するもの。(今回は出土していない)

**Ⅵ群** 続縄文時代に属するもの。

**Ⅶ群** 擦文時代に属するもの。(今回は出土していない)

## (2) 石器

石器は剥片石器群、磨製石器群、礫石器群、自然遺物に大別し、さらに器種分類を行った。大きさについてはmmを単位として用い、小数点第一位まで測った。長さ、幅については定型的なものについては長軸を基準に、不定形なものについては剥片剥離軸を基準に長方形を想定し測定した。厚さについては最大厚を測った。重量についてはgを単位として用い、小型のものについては小数点第二位、大型のものについては体重計を用いたため100g単位まで量った。また、礫石器に付した記号については、  
はすり痕、  
は敲打痕を示す。石材については頁岩、安山岩を主とし、凝灰岩、蛇紋岩が1点ずつ見られた。

### 剥片石器群

**石鏃** 押圧剥離により両面が剥離され、尖頭形を呈す5cm未満のもの。

**つまみ付ナイフ** 抉り状の加工により原則として素材長軸端部につまみ部が作り出されたもの。

**削器** 剥離が素材の側縁に連続的に加えられたもの。

**両面調整石器** 剥離が素材の両面に施されるが尖頭形でないもの。

**Rフレイク** 散漫な剥離が加えられた不定形のもの。

**剥片** 石核、石器から剥離されたもので、二次的な剥離を受けていないもの。

**石核** 石器の素材となりえる大きさ・形状の剥片を剥離した痕跡が複数あるもの。

### 磨製石器群

**石斧** 打欠き・研磨などにより棒状、短冊状に整形され、斧状の刃部があるもの。

### 礫石器群

**たたき石** 敲打痕があるものの内、能動的と考えられるもの。

**すり石** 擦り痕があるものの内、能動的と考えられるもの。

**台石** 擦り痕、敲打痕があるものの内、受動的と考えられるもの。

### 自然遺物

**礫** 遺跡に搬入された礫のうち加工痕、使用痕の見出せないもの。礫石器の原石も含まれる。

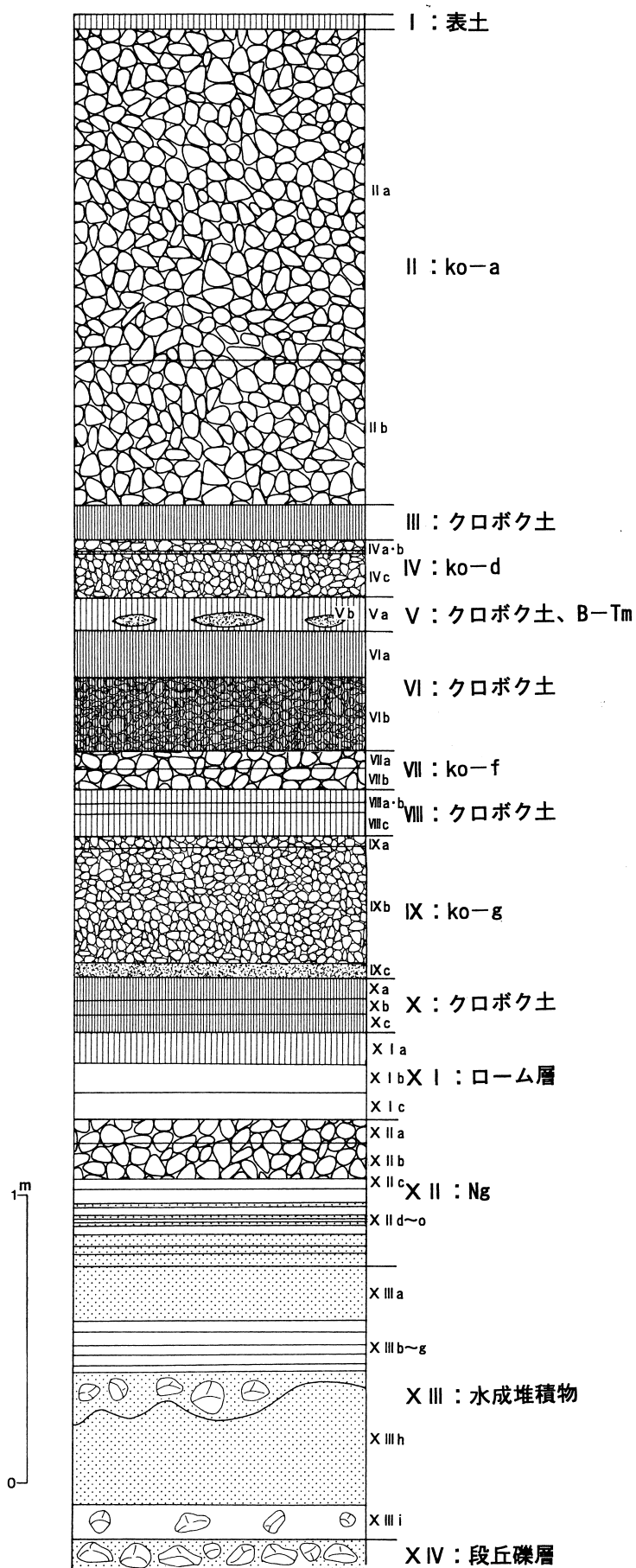


図 II - 4 - 2 基本層序柱状図



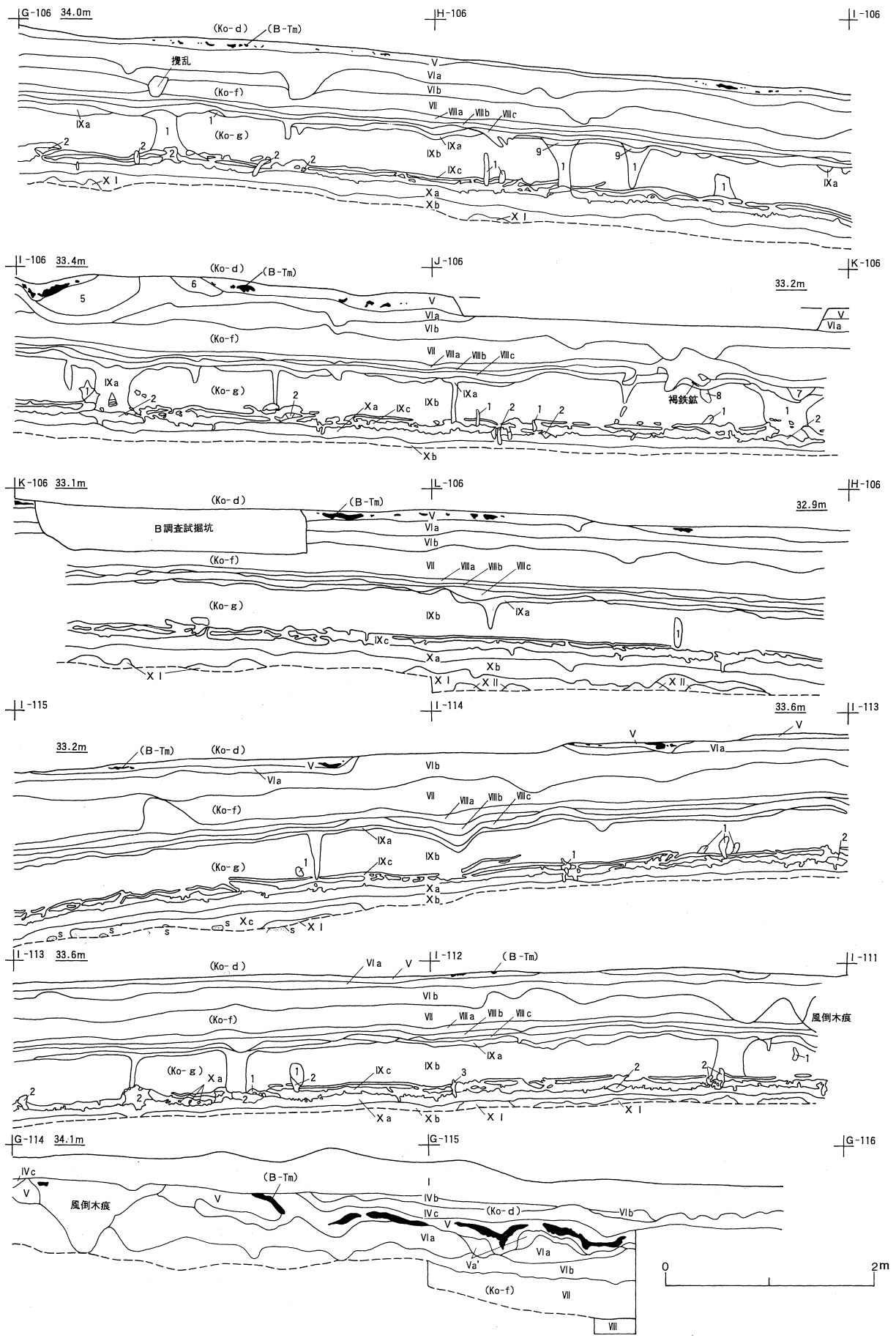


図 II - 4 - 3 土層断面図

# 遺跡の位置と環境

## 1 位置と環境

### (1) 位置と地形

鹿部町は北海道西南部渡島半島の一部をなす亀田半島の付け根に位置する。西に駒ヶ岳、南に横津岳に代表される山地、東は太平洋に面している。行政的には、北は砂原町、西は七飯町、南は南茅部町と接している。町の境界は北がドドメキ川河口、南が袴腰岳北東の尾根、西が駒ヶ岳頂上、東が中の川河口にある。

遺跡が位置するのは鹿部町の南東側、大岩地区にあたり、標高約30～40m海岸段丘上に立地する。南東には常路川が北東に流れている。海岸段丘との比高は約25mで、左岸はやや急、右岸は極めて急な崖をなす。右岸では崖崩れがみられる。海岸部の河口まで岩が多く幅の狭い流路で、70～80cm大の安山岩礫が大半を占める。河床には凝灰岩とみられる岩盤がみられる。川幅は4～5mで、深さも1mを超えない程度。しかし、秋には鮭が遡上し、ヤマメ、イワナ、ニジマス、アメマスなどが生息する。昭和9年発行の渡島支庁『管内水産業概要』では「本村河川中魚族の棲息最も多し」とされる。

調査区の北西側には河岸段丘の段丘崖とみられる崖が見られる。航空写真を見るとその崖は、常路川を沿うように中流の砂防ダム付近まで見られる。土層でみたように、調査区部分では濁川テフラの下位に水成堆積物が見られること、現地形でもこの段丘崖に沿うように沢地形が見られることから、更新世末期には常路川の流路がこの段丘崖下にあったものと考えられる。

遺跡付近の海岸は、主に人頭大の安山岩礫からなるが、一部礫岩や黒色頁岩、泥岩を含む。黒色頁岩の内さらにその一部には石器石材に適したものも含まれた。その石質は南茅部町黒鷲岬で採取できる黒色頁岩より良質のものである。海岸は北西に行くにしたがい部分的に砂浜がみられるようになり、南東では逆に岩礁が多くなる。遺跡前面の沖には昆布礁が連続し、良質な昆布を産する。

遺跡周辺のみならず地形、環境に大きな影響を与えているのが駒ヶ岳である。駒ヶ岳は富士山に似た成層火山であったが、度重なる噴火により山頂部が破壊されている。寛永17(1640)年の噴火が記録としては最も古く、以後20回以上の噴火活動が記録されている。記録に残る中でも規模が大きい噴火は寛永17(1640)年の噴火、昭和4(1929)年の噴火で、いずれも調査区では軽石層として確認することができた。

亀泊には鹿部温泉があるが、この温泉は寛政3(1791)年「えぞのてぶり」に見られるのが初出である。

気候は、北海道南西部太平洋側各地同様「温暖多雨」を特徴とする「表日本型」に属する。調査中はヤマセが吹くと霧雨になり晴天の日がほとんどなかった。また、7月はエゾ梅雨の影響で雨の日が多かった。今年4月末の表土除去時に積雪があり、その澄んだ空気の中、対岸の羊蹄山、登別といった噴火湾沿いばかりか、樽前山の溶岩ドームまで望むことができた。

遺跡からの眺望は、噴火湾沿岸以外に、南茅部町岩戸の黒羽尻崎周辺の岩礁が見える。ただ、駒ヶ岳は河岸段丘と木立で見ることができない。なお遺跡のある海岸段丘の崖上に立つと眼下の海浜に寄せる波音をよく聞くことができた。

### (2) 歴史的環境

鹿部町域は、近世初期に箱館六箇場所の一つオサツベ場所の一部となり、元和2(1616)年以降寛

政12(1800)年まで松前藩主慶広に仕えた新井田広貞の三男、知貞とその子孫が代々知行地としていた。なお、鹿部の地に和人が移住してきたのは元和元年、司馬宇兵衛が最初とされる。それ以前は南部下北大間地方の人が出稼ぎに訪れる状況であっただろう。

オサツベ場所の頃の文献はほとんどみられないが、「津軽一統志」には恵山から地名を列挙し、「おさつへ」、「かっくみ」の次に「ほろい滝 是迄昆布有」と書かれる。この滝は今の三味線滝のこととみられる。また菅江真澄の「えぞのてぶり」の寛政3(1791)年5月の記述にネタナイ、ウスジリ、ボヲロを過ぎて、トコロ、ザルイシ、シュシュベツ、カムイ、シリカベツ(シカベ)、スクノヘ、ホンベツ、相泊の様子が描かれる。トコロには、運上屋があり、その隣にアイヌのチセがあったらしい。またこのあたりの昆布がよいことが記されている。寛政年間にかかれた「松前国中記」によれば当時の産物は「昆布 鯧 鰯 鮫 布苔 かば 楯縄(しななわ) 鱈」である。産物は函館在尻沢辺村、小安、戸井、尻岸内、尾札部では昆布が一番に記されているのに対し、砂原より北では鯧が一番目に記されている。

寛政12(1800)年には前年に東蝦夷地が幕府直轄となったこともあって、箱館六箇場所が村並と認められた。天保松前嶋郷帳の「従松前東在」に「鹿部」とみえ、持ち場として本別が記される。弘化2(1845)年の蝦夷日誌には「シシベ 同じく岩石さき也、ザル石 少しの沢目にて細流れ 昆布取小屋有 此辺にて昆布は小石の上にて干すが故に 砂気なくしてよるしきなり 惣て此シカベ懸りの昆布を第一とする由也 小石浜通り少し行 此辺山近し 木立多し、トコロ川 此川 臼尻、シカベの境なり 越て岩石原少し行て、トコロ 夷人小屋一軒 昆布取小屋左右に多し 少し行て、五段瀧」と記される。

前述したように遺跡周辺は現在では、大岩地区と呼ばれている。大岩地区は、かつては「トコロ」と呼ばれていたとされる。しかし、江戸時代から昭和初期においてトコロは常路川より現在の南茅部町側を指していた。トコロは古くはオサツベ場所に含まれ、のちウスジリ領(持)となり、明治13年には熊泊村(現南茅部町)支トコロ、翌明治14年に分割して鹿部村に移された。

現在の地区名は北から本別、駒見、宮浜、鹿部、大岩で、明治28(1895)年漁業原簿では北から(本別川)(ウノトリ岩) 本別、(ジョ場岩)(折戸川) 折戸、石浜、高森、(鹿部川) 鹿部、亀泊、シシベ、大岩、(常路川) 常路、ホヤタロ、吹込、(中の川)がみられる。寛政以後の三味線滝～鹿部温泉のある亀泊までの地名の変遷をみると、「北藩記略」(天明4(1784)年)でサルイシ トコロ シヘウク、「えぞのてぶり」(寛政3(1791)年)でところ ザルイシ(ザルウシ) シュシュベツ カムイ、「蝦夷地行程記」(寛政3(1792)年)で滝ノ下 トコロ トコロ川 サル石 シシベ サメトリマ、「松前国中記」(寛政年間)でホヤタヲ トコロ サル石 シベウタ カモヘ泊、「松前随商録」(寛政末(1800)年)でサルイシ トコロ ミミエウタ、「蝦夷日誌」(弘化2(1845)年)で五段滝(滝ノ下) トコロ トコロ川 ザル石(サルイシ) シシベ(シシヘ) サメトリ間、「六ヶ場所道途」(嘉永7(1854)年)でトコロ 境川 ジャリ石 カメ泊、「南部家文書」(安政2(1855)年)でトコロ堺川 ザルイシ ススベ ヘヒツカ 亀泊り、「漁場収獲高調書」(明治9(1876)年)で所呂 大岩 亀泊となる。遺跡が位置する常路川より鹿部町側の大岩地区の呼称は明瞭とはいえないが、各文献から見て現在のザリ石川にその名が残る「ザルイシ」と呼ばれていたと考えられる。

戸数は「トコロ」については、安政7年には3戸と記録され、明治元年には1戸、明治3年には3戸、明治4年に4戸と微増、明治40年代には40戸前後、大正年間には30戸前後と変遷している。「ザルイシ」については明治42年「大岩」として10戸が記録され、大正年間には20戸前後になっている。

「トコロ」は古く所呂、處呂、床呂、常路、常呂などと表記されたものを明治15年地元から役所に「常路」に表記文字を統一したい旨の要望があり以後常路とされるようになった。常路の地名はアイヌ



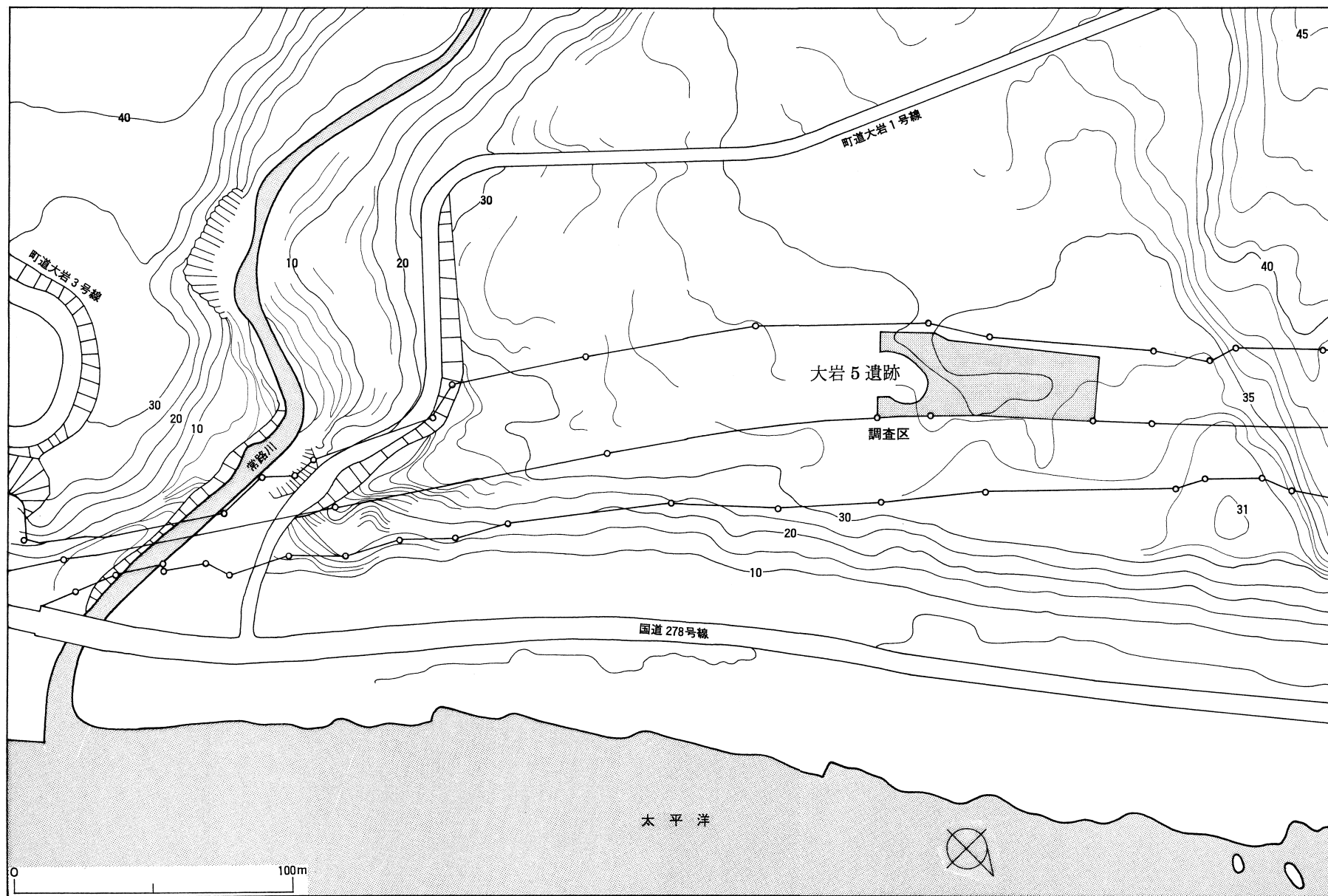


図 - 1 - 1 遺跡周辺の地形と調査区

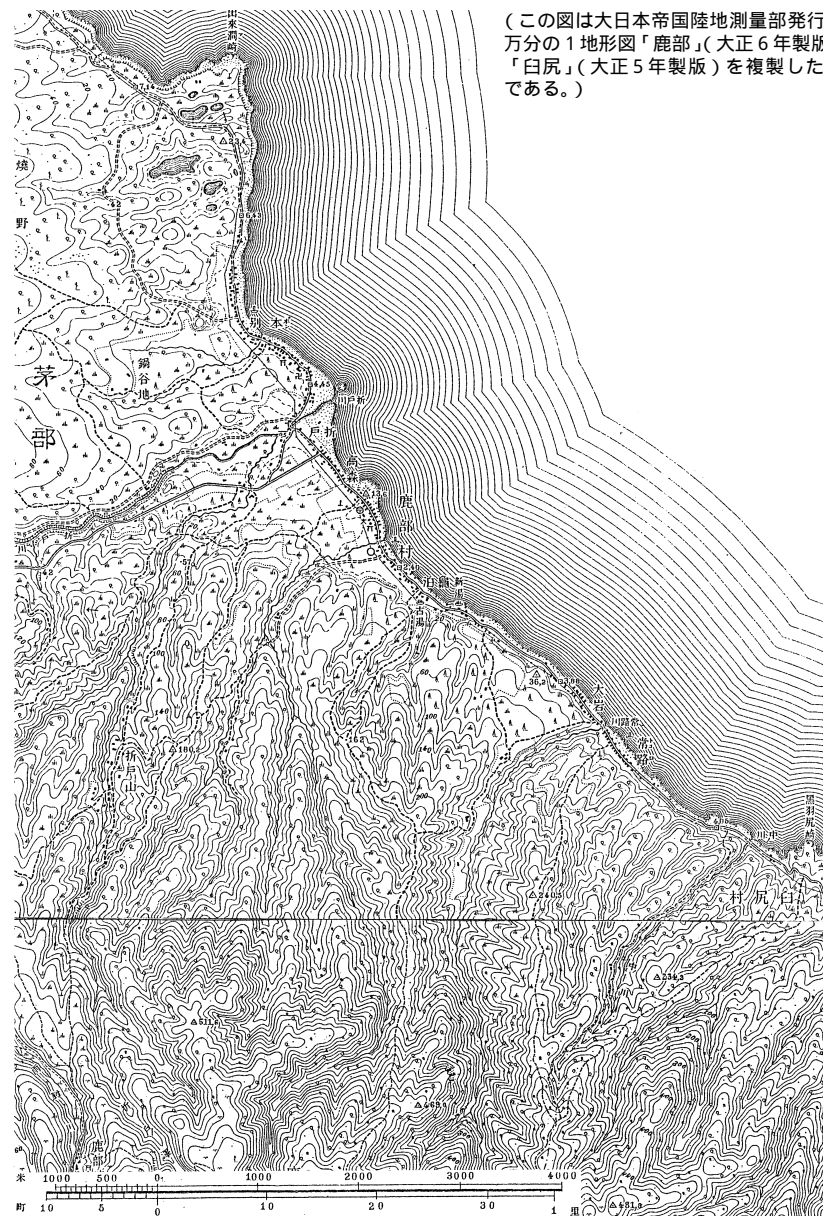
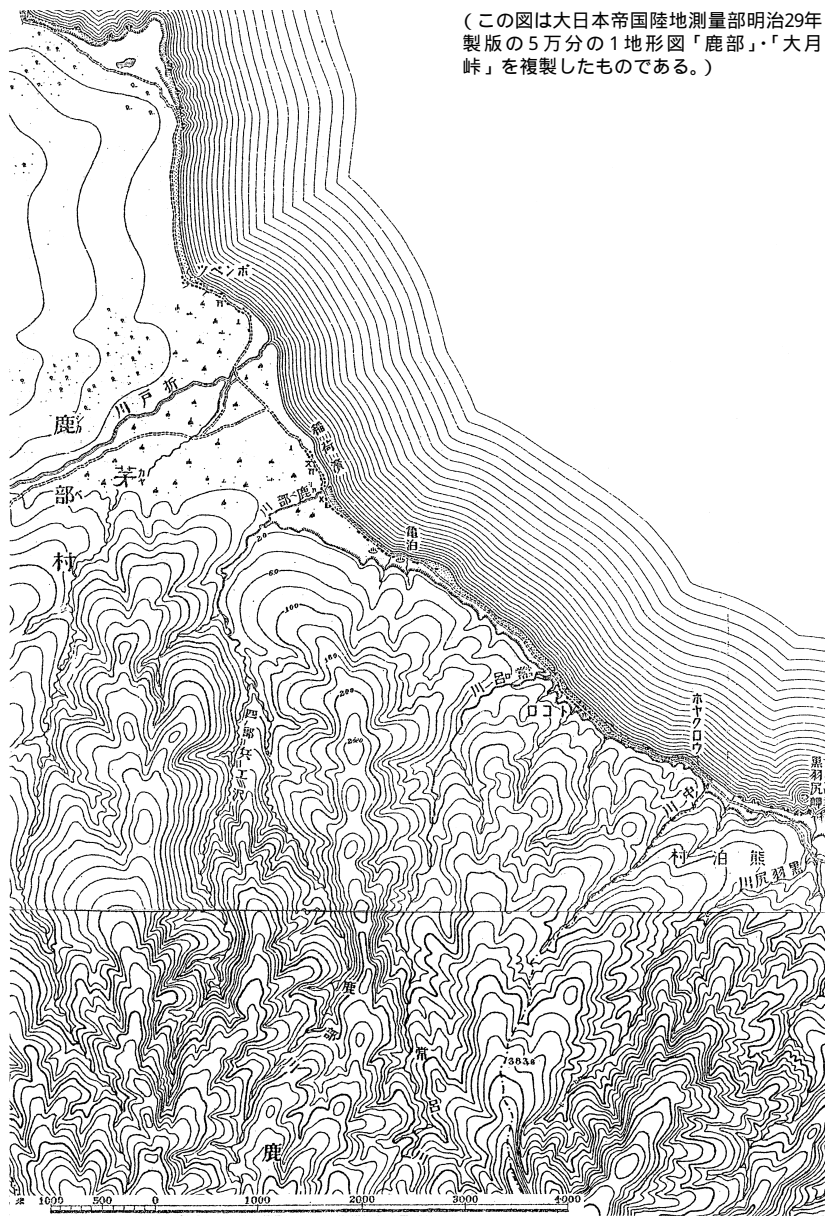


図 1 - 2 周辺の地形 (1)

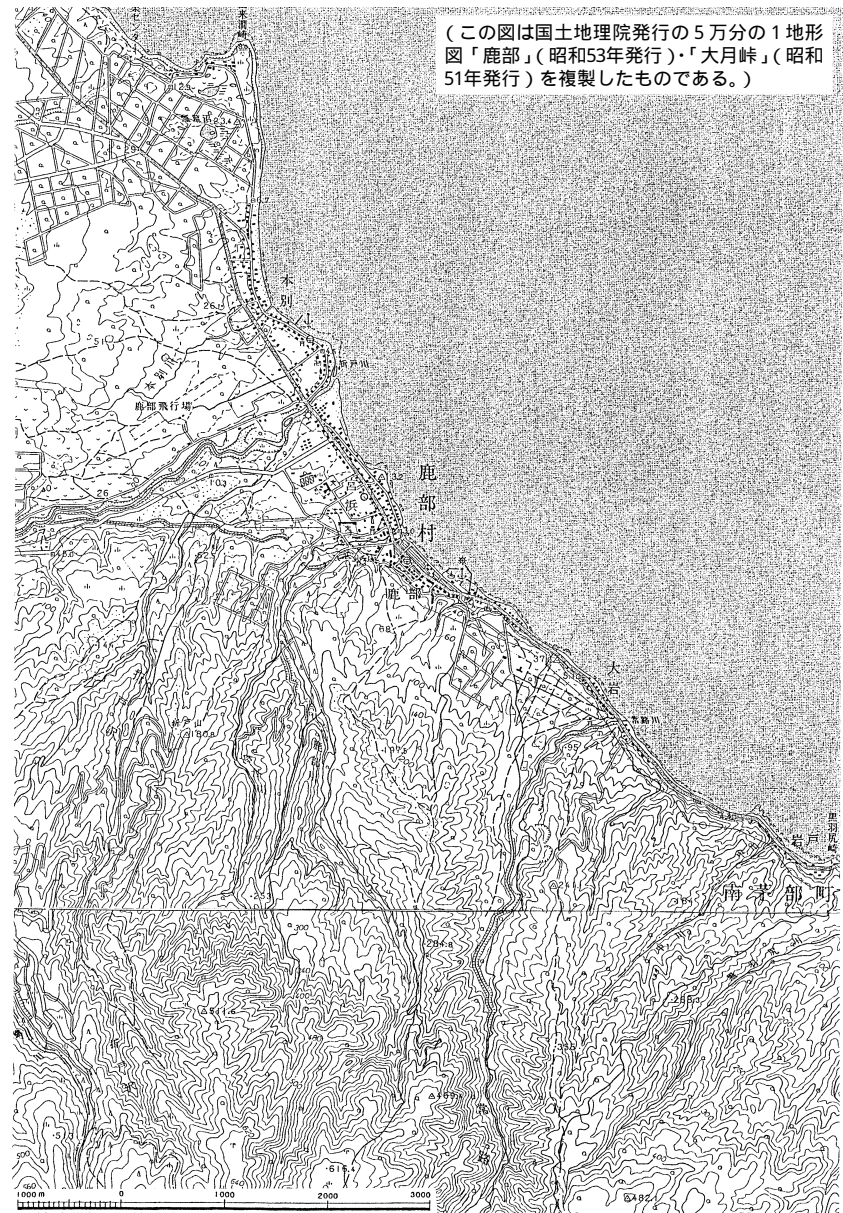
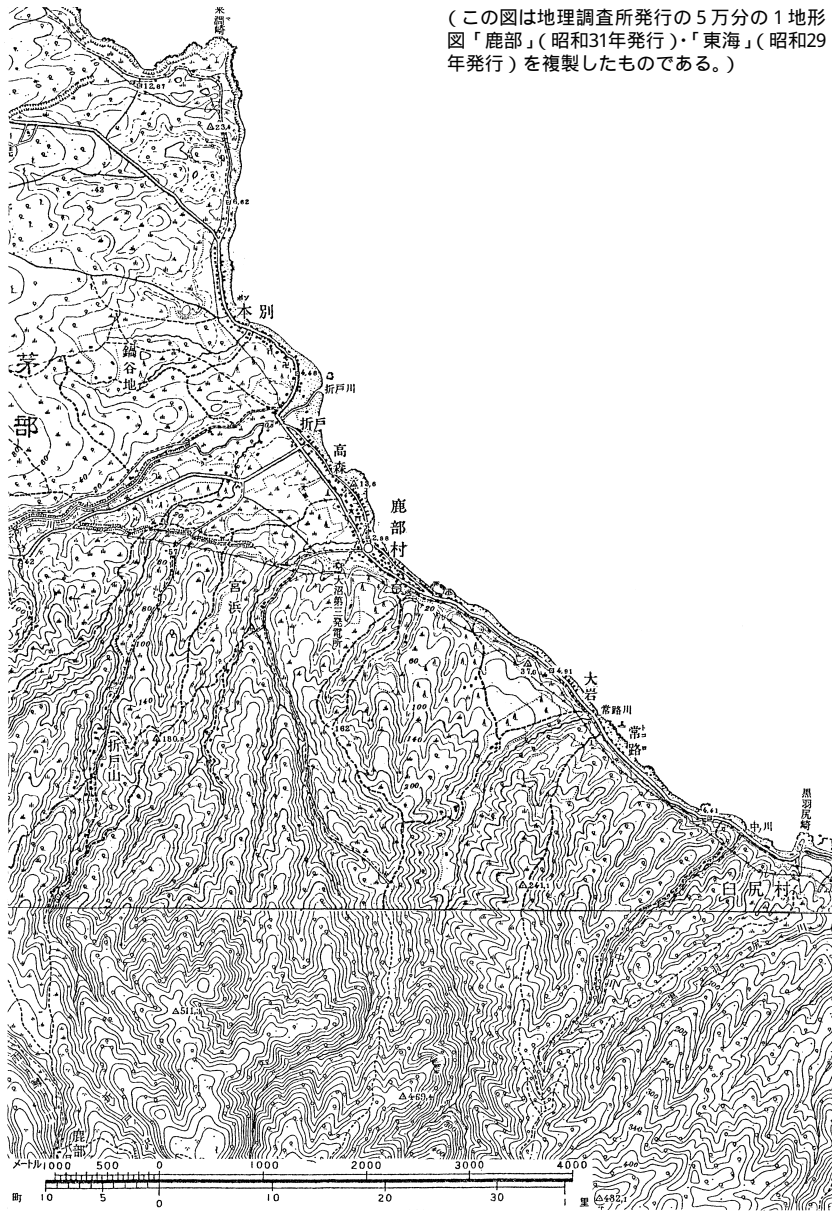


図 - 1 - 3 周辺の地形(2)

語トー・コロ、沼湖水のあるところに由来すると、「地名解」には「差出たる処、又土地の出来たる処」ともされるが、菅江真澄は「葦藪葛」(ところかつら)が多いところという地名解を残している。また明治15年の「鹿部村トコロ名称ノ儀上申」においても「アマトコロ」ト称フル草繁生、土人或ハ昆布取り入稼ノモノヲ掘テ其根ヲ食セシヨリトコロノ字ヲ付シタル様子」としている。「ザル石」については、地名解がみられないが、菅江真澄はアイヌ語で「ザルウシ」と記録している。「-ウシ」は「-群生する、-あるところ」の意とみられるが、「ザル」は「サル」の転訛したもので「葦原、湿地、沼地、藪」を指すかと思われる。しかし、海岸にはそのような場所は見受けられない。ただ、遺跡の存在する段丘上の古い河岸段丘崖とみられる崖と海岸段丘崖が接する部分は低みになり、調査期間内には確認できなかったが、地元の方の話では水が湧いているとのことであった。

## 2 周辺の遺跡

### (1) 鹿部町

鹿部町域では、現在6遺跡が掲載されている。そのうち、大岩2～4遺跡が、昭和51年5月の北海道教育委員会と鹿部町教育委員会の調査で確認されたものである。今回調査した大岩5遺跡は、鹿部パイパス工事に伴う遺跡所在調査により確認されたものである。以下に各遺跡について特色を記しておく。

**大岩遺跡**：登載番号B・13・1。鹿部町字大岩143所在。地目は昆布干し場、墓地。時代は縄文時代後期、晩期後半、続縄文時代前半。立地は海岸段丘上。町営干し場造成工事の際に確認された。干し場から大岩墓地にかけては晩期、国道から干し場に登る道路周辺は後期・晩期の遺物が散布していたらしい。干し場周辺の晩期の土器は大洞C1・C2で、大洞C1主体という。調査期間内においては大岩墓地と干し場の間の道路切り通しで晩期の土器が採集された。

**大岩2遺跡**：登載番号B・13・2。鹿部町字大岩1所在。地目は畑。時代は縄文時代晩期。立地は河岸段丘上。遺跡の前の深い沢に中の川が流れているという。現地は個人宅の裏山で国道から見ることはできない。土地所有者の知人の話では、今も遺物が散布しているということである。

**大岩3遺跡**：登載番号B・13・3。鹿部町字大岩168-1所在。地目は山林。時代は縄文時代晩期。立地は海岸段丘上。林道の切り通しで土器が採集されたようであるが、所在が確認できなかった。

**大岩4遺跡**：登載番号B・13・4。鹿部町字大岩169所在。地目は山林。時代は縄文時代晩期。立地は海岸段丘上。林道の切り通しで土器が採集されたようであるが、所在が確認できなかった。遺跡の前面の沢は三味線滝に通じるもの。

**鹿部台場跡**：登載番号B・13・5。鹿部町字鹿部266所在。地目は山林。時代は明治時代。立地は山頂。口碑により場所が確認されている。榎本武揚率いる旧幕軍が明治元年に築いた台場で、「楠見日記」に「峠下二台場一ヶ所、七重浜並びにシカベ越路江一ヶ所」と構築されたことが書かれる。古くからこの場所は台場ノ嶺と呼ばれ伝えられていたところであるが、昭和4年の駒ヶ岳の噴火で全面を軽石に覆われてしまったという。

このほかに、未掲載ながら遺跡の存在が「鹿部町史」に記載されている。

**「城部沢遺跡」**：鹿部川支流シロベ沢林道沿いにあるという。昭和38年に発見され、続縄文時代恵山式、縄文時代「円筒後期」(中期?)の土器が出土したとされる(図 - 2 - 1 - 8)。

**未命名遺跡**：東光寺の南西にある河岸段丘上にあるという。昭和26年頃から鹿部中学校に土器が持ち込まれた。時期は縄文時代前期から後期にいたる。現地周辺を踏査したが所在を確認できなかった(図 - 2 - 1 - 9)。

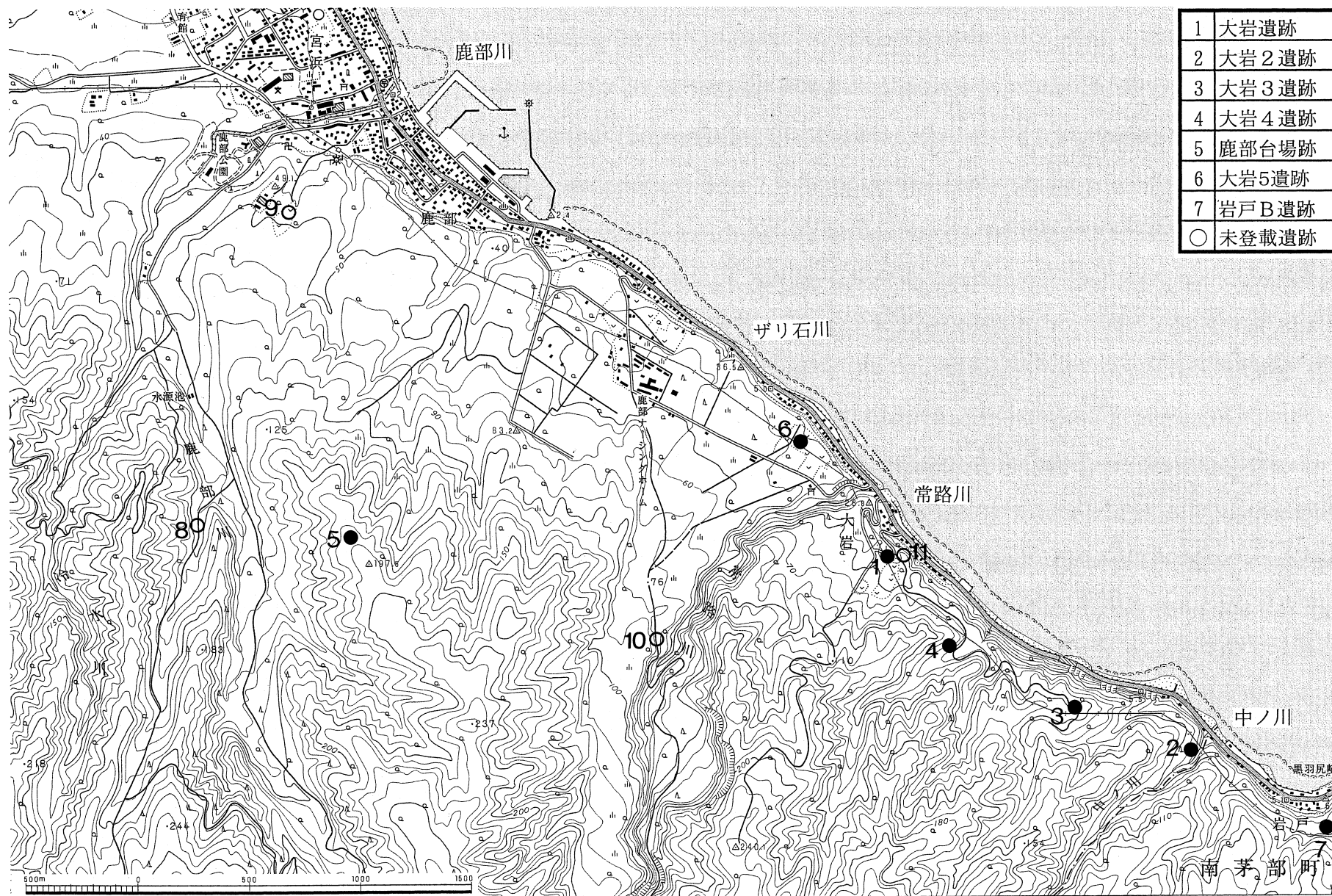
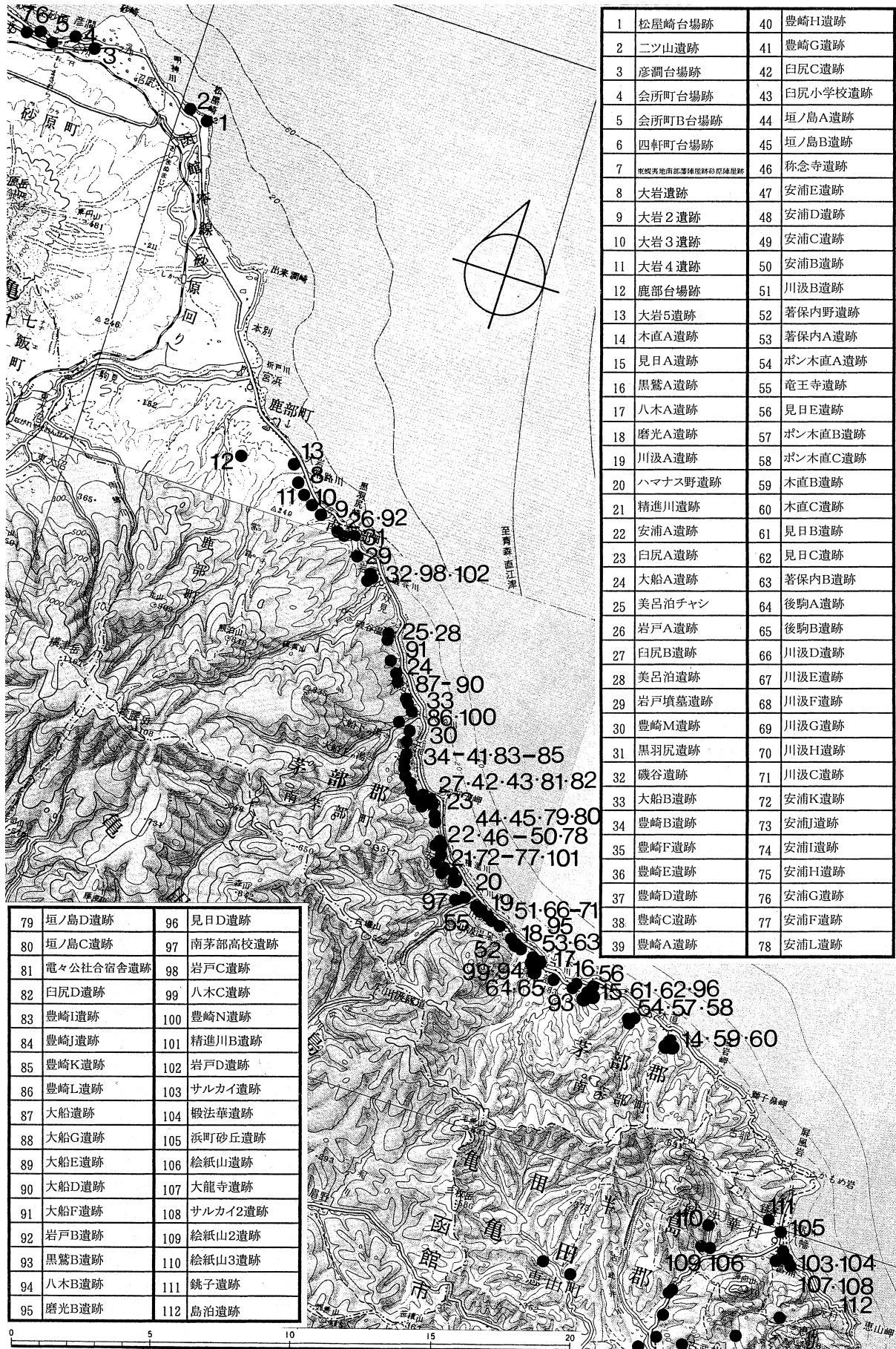


図 - 2 - 1 周辺の遺跡 (1)

(この図は国土地理院平成15年発行の2万5千分の1地形図「鹿部」を複製したものである。)





1	松屋崎台場跡	40	豊崎H遺跡
2	二ツ山遺跡	41	豊崎G遺跡
3	彦潤台場跡	42	白尻C遺跡
4	会所町台場跡	43	白尻小学校遺跡
5	会所町B台場跡	44	垣ノ島A遺跡
6	四軒町台場跡	45	垣ノ島B遺跡
7	豊崎地区南部遺跡群跡群跡群跡	46	称念寺遺跡
8	大岩遺跡	47	安浦E遺跡
9	大岩2遺跡	48	安浦D遺跡
10	大岩3遺跡	49	安浦C遺跡
11	大岩4遺跡	50	安浦B遺跡
12	鹿部台場跡	51	川汲B遺跡
13	大岩5遺跡	52	著保内野遺跡
14	木直A遺跡	53	著保内A遺跡
15	見日A遺跡	54	ボン木直A遺跡
16	黒鷲A遺跡	55	竜王寺遺跡
17	八木A遺跡	56	見日E遺跡
18	磨光A遺跡	57	ボン木直B遺跡
19	川汲A遺跡	58	ボン木直C遺跡
20	ハマナス野遺跡	59	木直B遺跡
21	精進川遺跡	60	木直C遺跡
22	安浦A遺跡	61	見日B遺跡
23	白尻A遺跡	62	見日C遺跡
24	大船A遺跡	63	著保内B遺跡
25	美呂泊チャン	64	後駒A遺跡
26	岩戸A遺跡	65	後駒B遺跡
27	白尻B遺跡	66	川汲D遺跡
28	美呂泊遺跡	67	川汲E遺跡
29	岩戸墳墓遺跡	68	川汲F遺跡
30	豊崎M遺跡	69	川汲G遺跡
31	黒羽尻遺跡	70	川汲H遺跡
32	磯谷遺跡	71	川汲C遺跡
33	大船B遺跡	72	安浦K遺跡
34	豊崎B遺跡	73	安浦遺跡
35	豊崎F遺跡	74	安浦I遺跡
36	豊崎E遺跡	75	安浦H遺跡
37	豊崎D遺跡	76	安浦G遺跡
38	豊崎C遺跡	77	安浦F遺跡
39	豊崎A遺跡	78	安浦L遺跡

79	垣ノ島D遺跡	96	見日D遺跡
80	垣ノ島C遺跡	97	南茅部高校遺跡
81	電々公社合宿舎遺跡	98	岩戸C遺跡
82	白尻D遺跡	99	八木C遺跡
83	豊崎I遺跡	100	豊崎N遺跡
84	豊崎J遺跡	101	精進川B遺跡
85	豊崎K遺跡	102	岩戸D遺跡
86	豊崎L遺跡	103	サルカイ遺跡
87	大船遺跡	104	鍛法華遺跡
88	大船G遺跡	105	浜町砂丘遺跡
89	大船E遺跡	106	絵紙山遺跡
90	大船D遺跡	107	大龍寺遺跡
91	大船F遺跡	108	サルカイ2遺跡
92	岩戸B遺跡	109	絵紙山2遺跡
93	黒鷲B遺跡	110	絵紙山3遺跡
94	八木B遺跡	111	銚子遺跡
95	磨光B遺跡	112	島泊遺跡

図 - 2 - 2 周辺の遺跡 (2)

20 (この図は国土地理院発行の20万分の1地形図「室蘭」(平成15年発行)・「函館」(平成5年発行)・「尻屋崎」(平成3年発行)を複製したものである。)

「新しく発見できた遺跡」：大岩共同干し場の北東で、畑地。縄文時代前期円筒下層式の土器片が採集された（図 - 2 - 1 - 11）。

また、北海道開拓記念館蔵の「熊野喜蔵氏資料目録」には時期は不明ながら本別から出土したとされる「貝製曲玉（1.8×1.1×0.4cm、孔の直径0.2cm）」が掲載されている。

なお、今回調査中に未掲載の遺跡を新たに確認することができた（図 - 2 - 1 - 10）。その遺跡は常路川の中流の河岸段丘上に立地し、地元の方の話によると40年ほど前に林道が掘削された当時から知られる「周知の遺跡」とのことであった。地目は山林。林道に切られた崖からは円筒上層b～c式の土器片を採集することが出た。

このように鹿部町内には遺跡の分布が薄いようにみえるが、駒ヶ岳起源の火山灰 特に昭和4年噴出のko-aが厚く堆積しているために畑地造成程度の地表改変では遺物を包含する黒色土が露出しないのがその主な原因と考えられる。

## （2）砂原（さわら）町

鹿部町同様駒ヶ岳起源の火山灰が厚く堆積する砂原町ではさらに少なく四軒台場跡、会所町台場跡、会所町B台場跡、彦澗台場跡、松屋崎台場跡の5か所の台場跡と国指定史跡砂原陣屋跡のほかに、二ツ山遺跡が知られるに過ぎない。

二ツ山遺跡は、縄文時代後期初頭の貝塚で、沢に面した海岸段丘上に立地している。土器のほかつまみ付きナイフ、石斧などの石器、釣針などの骨角器が出土しているらしい。また貝層からはエゾイガイ、タマキビ、ヒメエゾボラ、エゾニシなどの貝類のほか、ウニ、シカ、鳥類、魚類などの遺骸も確認されている。なお、熊野氏資料には縄文時代中期とされる有茎の石鏃、骨製刺突具が収集されている。砂原町史では、このほかに沼尻・砂崎の海岸段丘上に遺跡が存在することが記されている。時期は、縄文時代後期、晩期、続縄文時代（恵山式）で、段丘崖では縄文時代後期の竪穴住居跡が観察されている。

砂原陣屋跡は安政3（1856）年に盛岡藩陣屋分屯所として設置されたもので、今も東西約67m、南北約60m、高さ約3mの土塁が残されている。その他の台場は、明治元年現森町鷺の木に上陸した旧幕軍が官軍の防備として築いたものである。

## （3）南茅部（みなみかやべ）町

南茅部町では89か所の遺跡が確認されており、その多くが海岸段丘上に立地している。近年は大船C遺跡、垣ノ島A遺跡、垣ノ島B遺跡などの調査で全国的に注目されている。その情報量は膨大で、調査遺跡数19遺跡、350万点を超える出土遺物点数があるという。

以下、南茅部町の遺跡について時代・時期ごとに概観する。

**旧石器時代**：臼尻小学校遺跡から後期旧石器時代の彫器が出土している。また臼尻B遺跡からは「前期旧石器」の可能性があるとされる「石器」が出土している。

**縄文時代早期**：垣ノ島A遺跡で東釧路式期の足形付土版が17点、4基の土坑墓から出土している。また垣ノ島B遺跡では竪穴住居跡5軒、土坑162基が調査され、そのうち物見台式期の土坑墓から漆を塗った糸を加工した副葬品が出土している。この漆製品は遺体の頭部、両肩、両腕、両足にあたる場所に位置していた。ほかに大船遺跡、臼尻A遺跡、臼尻B遺跡、臼尻小学校遺跡、八木遺跡、川汲遺跡、川汲B遺跡などで遺物が確認されている。

**縄文時代前期**：ハマナス野遺跡で円筒下層a～d式期に相当する200軒以上の竪穴住居跡、260基以上の土坑、盛土などが調査されている。竪穴住居は中央の広場を中心として東西に分かれるように配

置されている。ここからは、ヒエ・ソバの炭化種子が竪穴住居跡から検出されたという報告がある。また八木A遺跡で円筒下層a～b式期を主体とする時期の盛土と盛土などに掘り込まれた83基の土坑墓、15軒の竪穴住居跡が調査されている。盛土からは骨角器や動植物遺体と言った有機質遺物を含む膨大な遺物が含まれていた。なかでも円筒下層a・b式に伴うとみられる男根形石製品が出土している。なお、前期の前半は遺物の出土が少ないが、福田氏はKo-g降下の影響を受けている可能性を指摘している（福田2002）。

**縄文時代中期：**大船C遺跡で榎林式期を主体に円筒上層a式～ノダップ式期の120軒の竪穴住居跡、80基の土坑、盛土などが調査されている。遺跡の広がりや密集の程度だけでなく、住居の大きさや深さといった規模も非常に大きいのが特徴的である。また白尻B遺跡でも円筒上層c式～ノダップ式期に至る竪穴住居跡330軒、土坑82基、墳墓10基などが調査されている。さらに、竪穴住居跡からはヒエの炭化種子が検出されたと報告される。ほかに精進川遺跡、ハマナス野遺跡、安浦B遺跡、木直C遺跡などで確認されている。

**縄文時代後期：**垣ノ島A遺跡で堂林式期の大型竪穴住居跡、漆塗り注口土器が出土している。また磨光B遺跡では鯨潤式期を主体とする竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡8軒、2群の集石と配石遺構などが調査され、掘立柱建物跡内の土坑からはアスファルトの塊とその加工場が検出されている。アスファルトは豊崎N遺跡では小型の深鉢に充填された形でも出土している。さらに著保内野遺跡から耕作中に発見された大型中空土偶は後期後半十越内式期のもので黒漆が塗られており、国の重要文化財に指定されている。ほかに木直C遺跡、白尻B遺跡、白尻D遺跡、白尻小学校遺跡、八木B遺跡などで確認されている。なお、白尻遺跡においても「ストーンサークル」が検出されている。

**縄文時代晩期：**大船遺跡で二重炉址と言われた円形の大型石組み炉が検出されている。

**続縄文時代以降：**美呂泊遺跡で恵山式期の貝塚、「濠」が確認されている。ほかに見日遺跡などで確認されている。また白尻B遺跡ではアイヌ文化期の墓も検出されている。

#### （４）榎法華（とどほっけ）村

榎法華村では正式な発掘調査はなされていないものの、12遺跡が確認されている。海岸段丘よりは河川に沿う丘陵のほか、砂丘上、山地と丘陵の地形変換点、山地に流れる河川に沿った平坦面といったところで遺跡が確認されている。縄文時代早期では、榎法華出土の尖底土器が出土は不明瞭ながら道指定の有形文化財に登録されている。前期では銚子遺跡やサルカイ2遺跡、絵紙山3遺跡で円筒下層式土器が確認されている。後期では大龍寺遺跡、榎法華遺跡、絵紙山遺跡、オンコの木沢遺跡で、晩期では大龍寺遺跡、榎法華遺跡で土器や石器が確認されている。大龍寺遺跡は古くから貝塚があるとされ、よく動物の骨が見つかるようであるが、あるいは盛土遺構が存在するのかもしれない。

続縄文時代（恵山式）の砂丘遺跡としては浜町砂丘遺跡がある。貝層も確認されており、魚や海獣の骨も採集されている。ほかに浜町遺跡、大龍寺遺跡、榎法華遺跡でも恵山式土器が確認されている。

以上、亀田半島太平洋側では、南茅部町大船川から尾札部川の間低位海岸段丘上に集中的に遺跡が見られ、それ以外の地域では、河川に沿って遺跡が形成されているようである。鹿部町域においても河川に沿ってやや内陸側に未確認の遺跡が存在する可能性がある。特に縄文時代前期・中期における大規模集落跡は主要河川に沿うように存在する可能性が考えられる。常路川上流の新規発見遺跡などはそのような遺跡の可能性もある。いずれにしても鹿部町域においても数知れない遺跡が存在していることが推測される。

# 包含層出土の遺物

## 1 概要

総数208点の遺物が出土した。その内訳は土器133点、石器36点、礫39点。層位別に見ると a層から土器33点、石器18点、 b層から土器100点、石器6点、 c層から石器11点、 d層から石器?1点。分布は a層では105~115ラインの間に散漫に分布し、 b層ではK - 106グリッドを中心に分布する。また c層では110~115ラインの間に散漫に分布している。

## 2 土器

土器は、縄文時代前期円筒下層d式相当のものがほぼ1個体分で104点、続縄文時代恵山式のものがほぼ2個体分で29点である。前者は c層下部の軽石が多く含まれる層序から、後者は d層上部でB-Tm直下付近から出土した。分布は、縄文前期土器がK - 105・106グリッドで出土し、恵山式土器がG - 106、I - 112、K - 106、L - 107グリッドで出土している。

### 縄文時代前期の土器 群b類(図 - 2 - 1 - 1~6、図版7)

1~6は、まとめて出土したもので、口縁~底部までの破片があるものの半分以上がB調査で確認されたものである。口縁部は部分しかないが平縁とみられ、外反する。口頸部文様帯は約7cmと幅広く、わずかな隆帯で区画される。口頸部文様帯には2条の綾線文、馬蹄形を呈する撚り糸圧痕の列、2条の撚り糸圧痕、馬蹄形を呈する撚り糸圧痕の列、隆帯上の2条の撚り糸圧痕の順にいずれも口縁と平行に施文される。口唇には縄の圧痕による刻みがなされる。胴部は多軸絡条体の回転文が底部近くまで施文される。底部は平底。胎土には繊維と石英が含まれる。4は胴部上半、5は胴部下半。円筒下層d2式土器に相当する。

### 続縄文時代の土器 群(図 - 2 - 1 - 7~12、図版7)

7・8は、鉢形土器で同一個体。口唇には丸棒状の工具による刻みが付き、内面には稜を作る。口縁直下から胴部にかけては附加条2種(LRにR巻きつけ)の回転文が施文される。基面には凹凸がみられ、やや稚拙な作り。内面は横位調整。底部はあげ底。胎土に輝石が多く含まれる。焼成は悪い。7・8は割れ面の擦れにより接合しなかった。恵山式土器の南川 群に相当する。

9は、甕形土器の口縁部破片で、横走る沈線が6本入る。口頸部は外反するものの、1・2と比較して幅が狭い。口唇の断面は角張る。体部には縞縄文が施文される。胎土には輝石が多く含まれる。色調は黄褐色を呈す。恵山式土器の南川 群に相当する。

10・11は、同一個体で、口縁部から胴部にかけて縞縄文が施文される甕形土器。施文後は器面を縦方向に磨いて光沢を出している。内面は横調整。口唇部はややラフながら面取りする。口頸部は幅広く大きく外反し、胴は緩やかに膨らむ。底部はあげ底。高台は軟らかいうちに正立させたためか、ややつぶれている。焼成もよく赤褐色を呈す。恵山式土器の南川 群に相当する。

12は、甕形土器の底部に近い胴部片とみられるもので、縞縄文施文後縦方向に磨いたもの。胎土に輝石が多く含まれる。色調はやや白っぽい黄褐色を呈す。恵山式土器。

## 3 石器

石器は石鏃、削器、つまみ付きナイフ、磨製石斧、すり石、たたき石などが縄文時代早期、縄文時代前期、続縄文時代恵山式期に相当する土層から出土している。総点数は75点で、その内23点を実測

した。剥片石器は26点あり、石鏃1点、つまみ付きナイフ1点、削器4点、両面調整石器1点、Rフレイク4点、剥片11点、石核3点。磨製石器は1点で磨製石斧。礫石器は10点あり、たたき石5点、すり石4点、台石1点。礫は39点。石材は、頁岩が23点、安山岩が11点、凝灰岩・蛇紋岩が各1点。

#### 石鏃(図 - 3 - 1 - 1、図版8)

b層から1点出土した。1は頁岩製で、凹基有茎鏃。茎部と一方のかえしを欠損する。調整は入念になされる。

#### つまみ付きナイフ(図 - 3 - 1 - 2、図版8)

層の風倒木痕の凹みから1点出土した。2は頁岩製で、縦長剥片を素材に、背面をほぼ覆うように平行剥離で調整している。つまみ部の作りは入念で、工字形に整えている。末端を欠損。

#### 削器(図 - 3 - 1 - 3~6、図版8)

4点出土し、3点が a層、6が b層から出土している。いずれも頁岩製。3・4は台形状の横長剥片を素材に、末端の辺を刃部とするもの。3の調整は背面に限る。刃部腹面には使用によると考えられる光沢が見られる。4はポジ ポジ剥片を素材としており、腹面の打面側に厚さを減じるためとみられる調整を施す。5は縦長のポジ ポジ剥片を素材に、その末端の辺の腹面に刃部を形成している。右辺刃部両面には光沢が見られる。6は縦長剥片を素材に両側背面に調整を施すもの。特に右辺は部分的に平行剥離を施し、その部分の腹面には光沢が見られる。なお、5と6は同一母岩とみられる。

#### 両面調整石器(図 - 3 - 1 - 7、図版8)

a層から1点出土した。出土地点は '層の土石流堆積物の礫が 層に多数含まれる地点。7は頁岩製で、尖頭部を欠損する。両面を粗く調整した後、側縁を細かく調整する。

#### Rフレイク(図 - 3 - 1 - 8~11、図版8)

4点出土し、2点が a層、8が a層から出土している。11はB調査時に出土したもので、層位は不明。いずれも頁岩製。8は縦長剥片の右側両面に不連続に調整がなされるもの。9はヒンジフラクチャ - を起こした横長剥片の両側背面に微細剥離が見られるもの。10は台形状の縦長剥片の左側背面に微細剥離の見られるもの。11は縦長剥片の右側背面打面側に微細剥離が見られるもの。

#### 剥片(図 - 3 - 1 - 12、図版8)

a層から7点、 層から1点、 b層から2点、 層から1点の計11点が出土している。 層から出土したのが凝灰岩製、 層から出土したのが安山岩製で、ほかは頁岩製。頁岩の内1点は赤色を呈するもの。12は 層から出土したものである。同層位には安山岩の礫が多数含まれており、その要因も土石流の可能性があるのでその際に自然に礫同士がぶつかり合って剥片状に剥がれた可能性も考えられる。しかし、これが出土した地点では周囲に礫はほとんど分布せず、側縁が鋭利であることから人工の剥片とした。

#### 石核(図 - 3 - 1 - 13、2 - 14・15、3 - 24、図版8・9)

3点出土し、2点が a層から、13が b層から出土した。いずれも頁岩製。13は角礫から薄手で小型の剥片を2~3枚剥離して放棄したもの。鋭利な側縁には微細剥離痕、一端には敲打痕も見られ、複合的な使い方をされたと考えられる。14・15は剥片4点とともに接合する(24)。いずれも同一グリッドで出土した。接合状況を見ると角礫の狭い原石面を両設打面とし、数枚剥離するごとに打点転移したものの。ただ素材は節理や、褐鉄鉱の染み込みも著しく、一見被熱したかのようなクレーターも多数見える石器素材としては粗悪なもの。15は上記の過程で得られた剥片を素材に、背面を数回剥離している。



**石斧（図 - 3 - 2 - 16、図版 9）**

b層から1点出土した。16は円礫を研磨した片刃のもので、蛇紋岩製とした。ただ、明緑灰色を呈する部分が多く、変成岩類の透輝石の可能性がある。片面は被熱している。基部と刃部を欠損する。一面には付着物が見られるが、由来は不明。

**たたき石（図 - 3 - 2 - 17~19、図版 9）**

5点出土し、3点が a層から、2点が 層から出土した。いずれも安山岩製の円礫で、17・18は側面、19は点状に敲打痕が見られる。

**すり石（図 - 3 - 2 - 20~22、図版 9）**

4点出土し、2点が 層から、 a層、 b層から各1点出土した。いずれも安山岩製の円礫で、3点は一面にすり面のあるもの。20は三角柱状をした礫の稜に僅かにすり面が見られるもの。縄文時代早期の所産とみられる。

**台石（図 - 3 - 2 - 23、図版 9）**

B調査時に1点出土した。23は安山岩製の扁平礫で、一面が僅かに凹み、すり痕が見られる。

**礫**

層22点、 a層8点、 b層6点、 層3点の計39点出土した。いずれも人為的に遺跡に持ち込まれたとみられる。凝灰岩とみられるものが2点あるほかは、安山岩。ほかに 層においても礫が見られたが、同層下位に堆積している土石流堆積物の影響によるものと判断した。

**4 小結 まとめにかえて**

今回の大岩5遺跡の調査では、遺構は検出されず、遺物も極めて少なかったが、鹿部町内初の本格的な発掘調査によって、縄文時代早期、前期、続縄文時代の人の痕跡を見出すことができた。既に縄文時代中期、後期、晩期の遺物が採集されていたことから、今回の調査により鹿部町域においても縄文時代早期～続縄文時代に人が足跡を残していたことが明らかにされたと言える。また、地質学で確認されていた火山灰層が遺跡調査で遺物の出土状況とともに確認されたこと、その年代観が従来と大きく異なっていることが<sup>14</sup>C年代と遺物から明確にできたことも一つの成果といえる。

**〔付記〕 駒ヶ岳 f 降下軽石層と遺跡・遺物**

駒ヶ岳 f 降下軽石層（以下Ko-f）は従来その年代が $2,750 \pm 110$  y .B .P（Gak-2836）とされた（佐々木ほか1971）。しかし、その年代測定試料はKo-f上位の腐植土から抽出した腐食酸であり、したがってKo-f降下後、噴火のダメージから植生が回復してからの年代値が測定されたと理解される。この年代値は当然Ko-f降下年代を示しているとは考えられないため、奥野らによりKo-f直下の腐植質土壌及びそれに含まれた炭化木片の<sup>14</sup>C年代測定がなされた（奥野ほか1999）。その結果、 $5,480 \sim 5,730$  y .B .P（NUTA - 5783・5785・5842）の測定値が得られ、おおむね5,500年前であることが明らかになった。また既に同様の方法で測定されているKo-g直下のデータ $6,570 \pm 80$  y .B .P（NUTA - 5784）とも矛盾するものではないが、Ko-gについては $5,750 \pm 110$  y .B .P、 $5,760 \pm 120$  y .B .P、 $6,130 \pm 120$  y .B .Pといくつか年代値が測定されている。今回の調査で得られた両テフラ下位層採取炭化物の<sup>14</sup>C年代値は、Ko-f下位で $5,800 \pm 40$  y .B .P、Ko-g下位で $6,250 \pm 50$  y .B .Pと測定された。Ko-f下位採取試料は b層のクルミを試料としたため、奥野らがKo-g中の炭化材を測定した年代値に近い。Ko-g下位採取試料についてはその直下の炭化材を試料としたため信頼度の高いデータと考えている。

このように地質学ではKo-fの年代観が近年見直されるようになったが、考古学では過去に測定され



図 - 2 - 1 包含層出土の土器

た「縄文時代中期」相当の年代値と出土遺物に異同があることから遺跡調査で意識されることが少なかった。しかし、南茅部町ではKo-g(八木A遺跡調査時はKo-fとKo-gが一括して扱われていたという)の下位から早期末の土器が出土し、上位から八木A遺跡で前期初頭網文式・中野式相当の土器が確認されるものの基本的に前期中葉以降の土器が出土することが確認されていた。したがって今回の<sup>14</sup>C年代値も含め新しい年代値と南茅部町でKo-g下位から出土する土器の時期から考えると前期初頭に相次いで駒ヶ岳が噴火したことが想定される。このような事例の積み重ねからすると、今後はKo-fとgの間層に含まれる遺物の確認が重要になってくると考えられる。

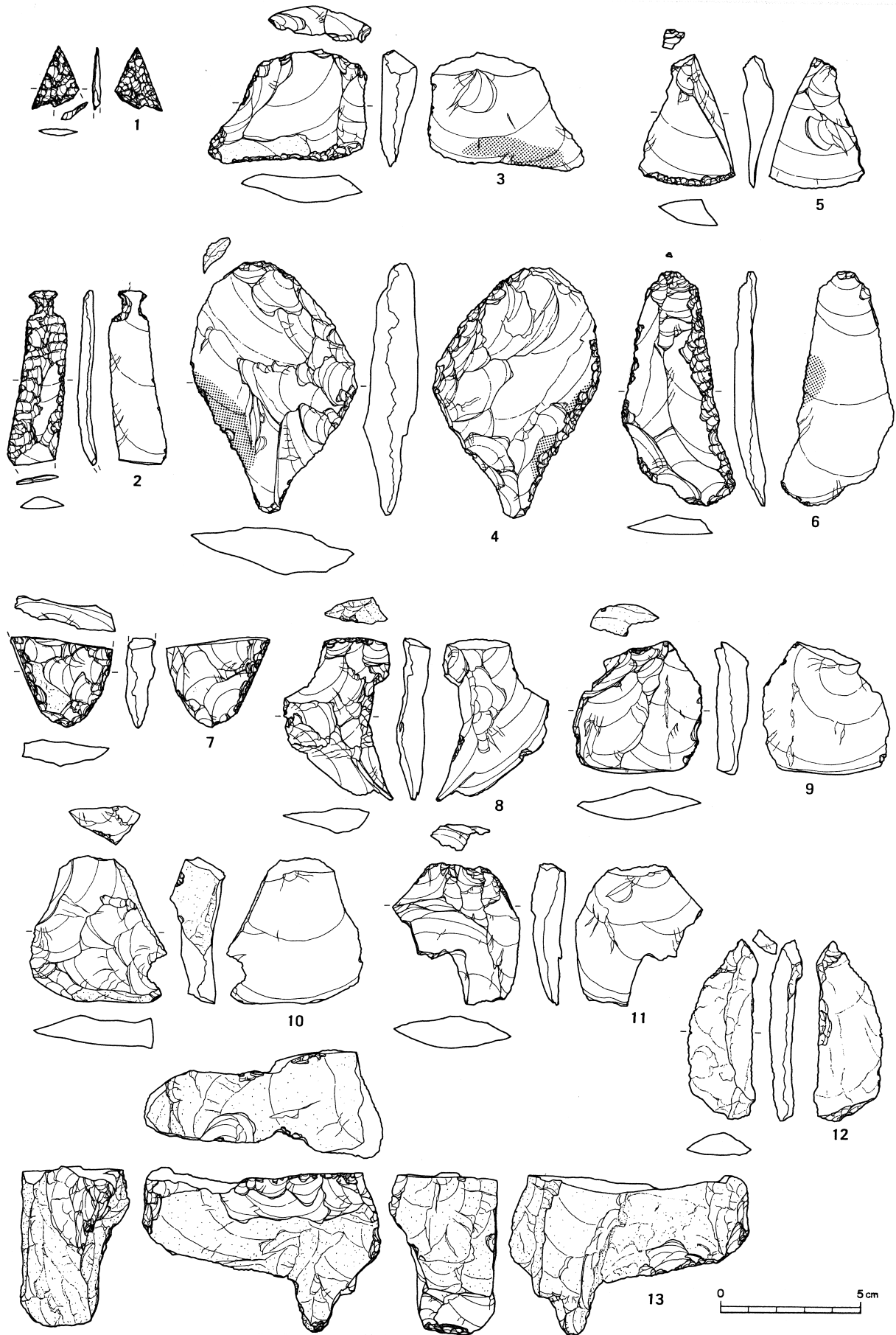


図 - 3 - 1 包含層出土の石器 (1)  
(スクリーントーンは光沢のある部分)

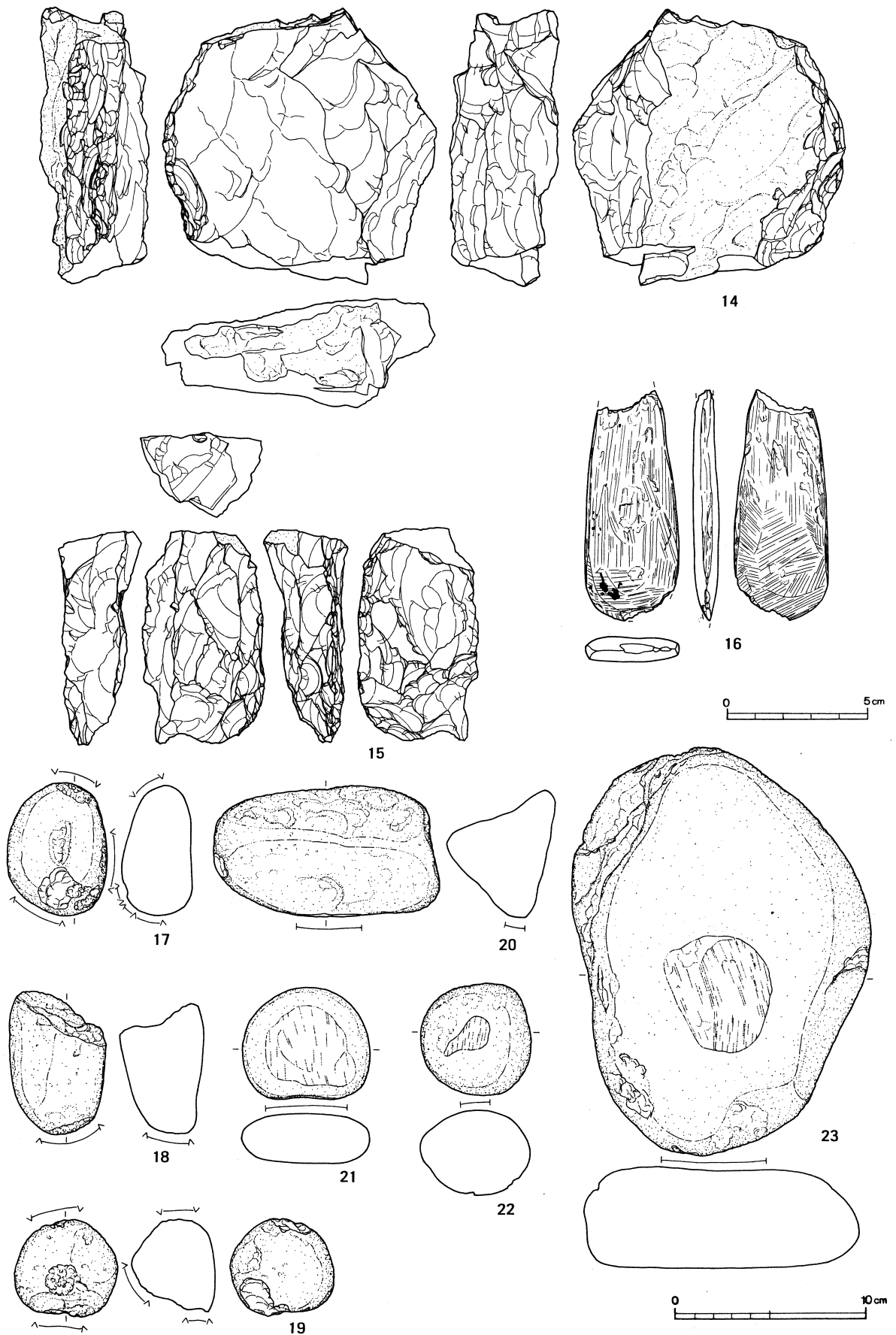


図 - 3 - 2 包含層出土の石器 ( 2 )

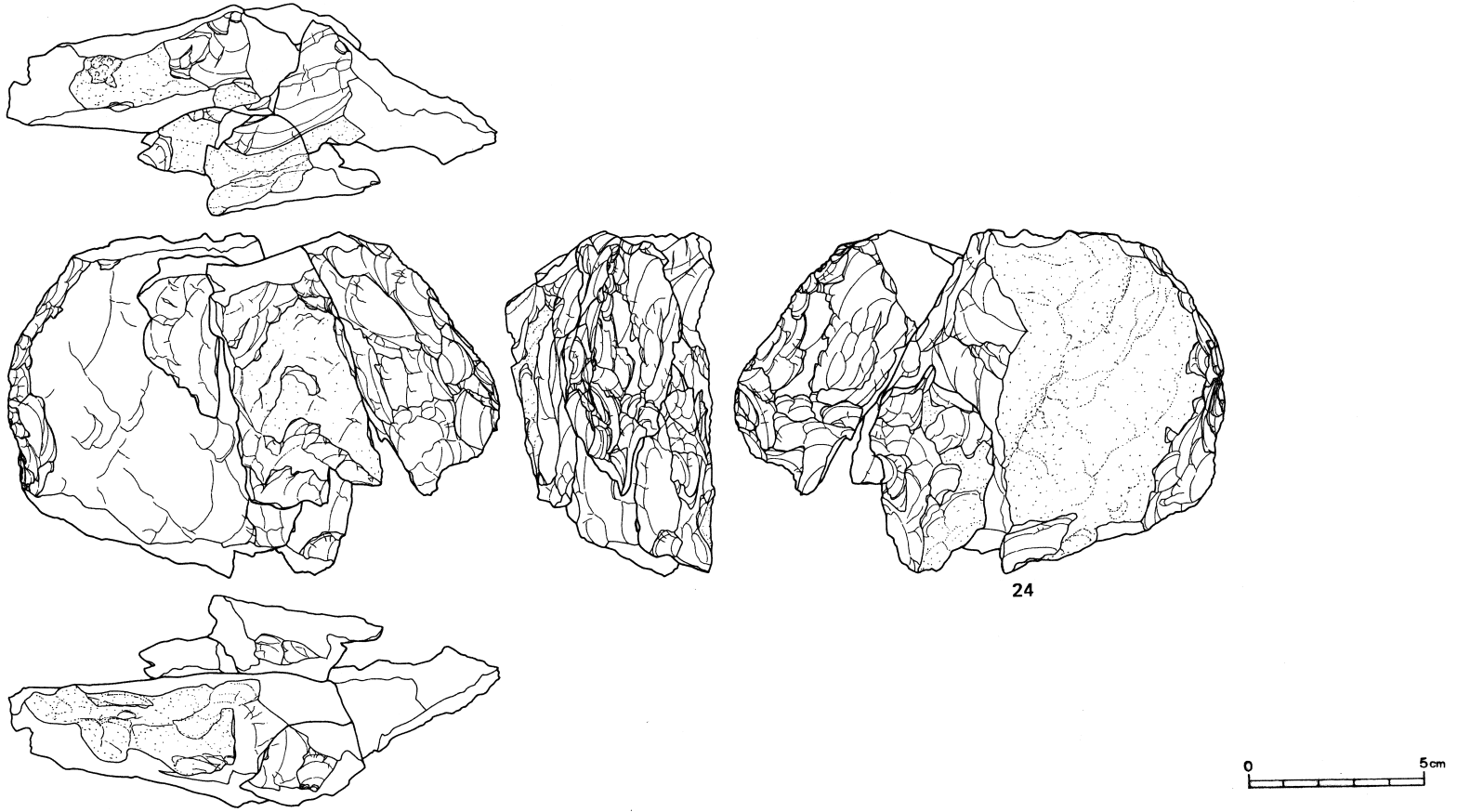
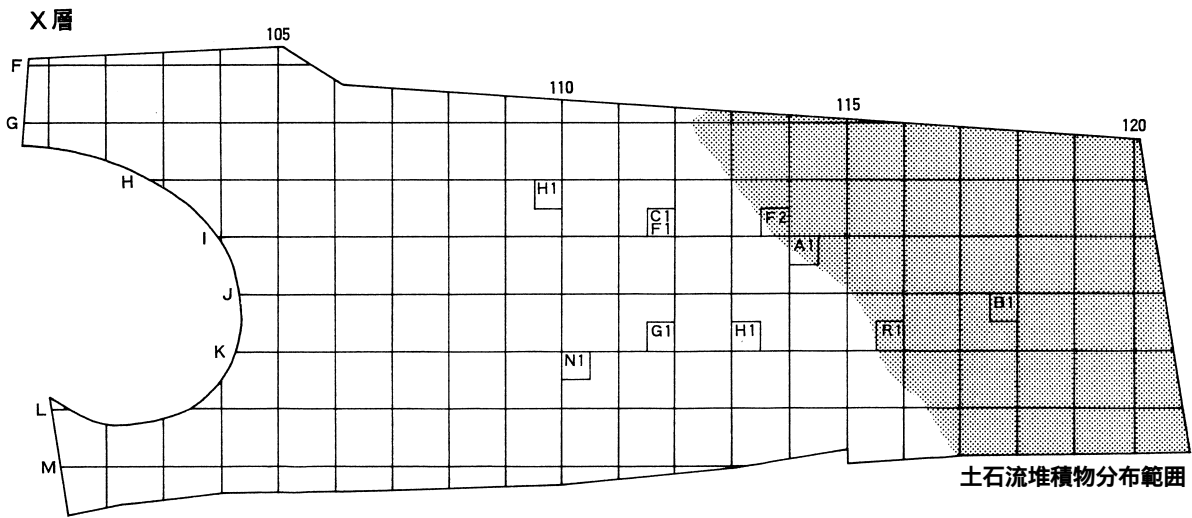
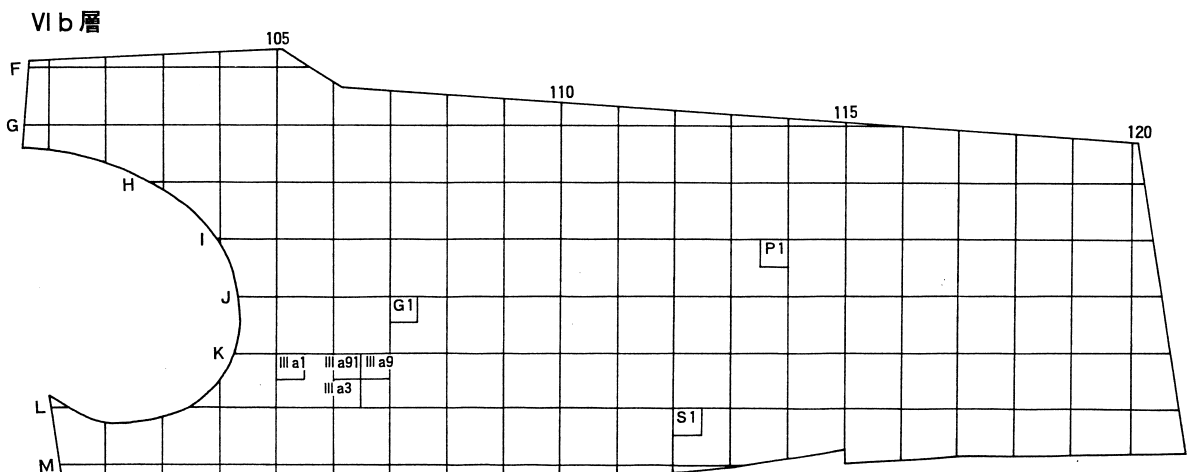
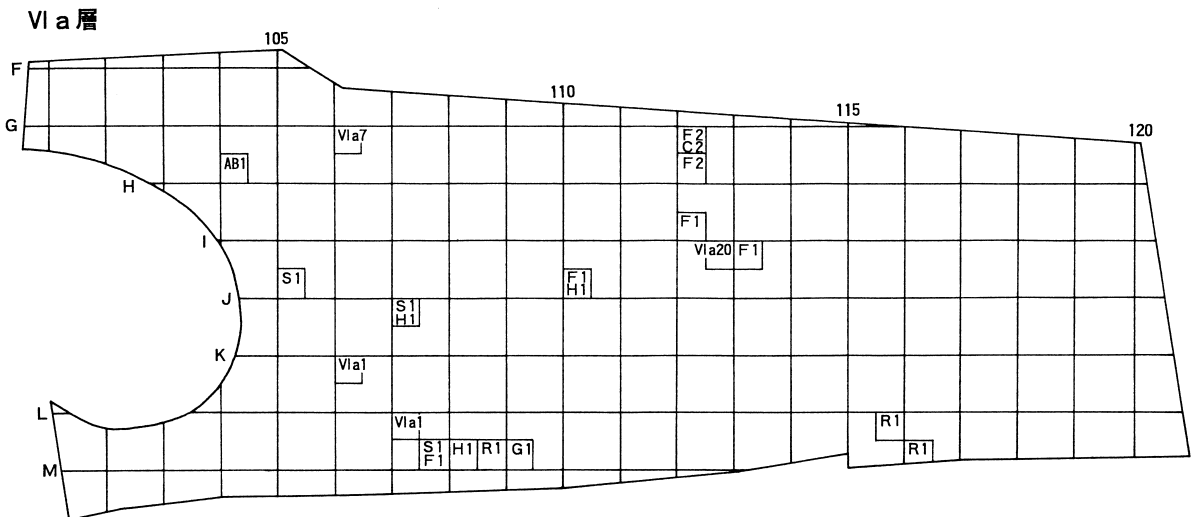


図 - 3 - 3 包含層出土の石器(3)





P: 石鏃、N: つまみ付きナイフ、S: 削器、B: 両面調整石器、R: Rフレイク、F: 剥片、C: 石核、A: 磨製石斧、H: たたき石、G: すり石、AB: 台石、III a: 円筒下層式土器、Via: 恵山式土器

図 - 4 - 1 包含層出土遺物の分布

# 自然科学的手法による分析結果

## 1 <sup>14</sup>C年代

(株)地球科学研究所

### 報告内容の説明

**未補正<sup>14</sup>C年代 (y BP)** : (同位体分別未補正) <sup>14</sup>C年代 “measured radiocarbon age”  
試料の <sup>14</sup>C / <sup>12</sup>C 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前 (BP) かを計算した年代。

**<sup>14</sup>C年代 (y BP)** : (同位体分別補正) <sup>14</sup>C年代 “conventional radiocarbon age”  
試料の炭素安定同位体比 ( <sup>13</sup>C / <sup>12</sup>C ) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り <sup>14</sup>C / <sup>12</sup>C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。  
試料の δ <sup>13</sup> C 値を -25 (‰) に基準化することによって得られる年代値である。  
(Stuiver, M. and Polach, H.A. (1977) Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data. Radiocarbon, 19 を参照のこと)  
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

**δ <sup>13</sup> C (permil)** : 試料の測定 <sup>14</sup>C / <sup>12</sup>C 比を補正するための <sup>13</sup>C / <sup>12</sup>C 比。  
この安定同位体比は、下式のように標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(\text{ }^{13}\text{C} / \text{ }^{12}\text{C})[\text{試料}] - (\text{ }^{13}\text{C} / \text{ }^{12}\text{C})[\text{標準}]}{(\text{ }^{13}\text{C} / \text{ }^{12}\text{C})[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、<sup>13</sup>C / <sup>12</sup>C [標準] = 0.0112372 である。

**暦年代** : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 <sup>14</sup>C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の <sup>14</sup>C の測定、サンゴの U-Th 年代と <sup>14</sup>C 年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース (“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)) により約 19000yBP までの換算が可能となった。\*

\*但し、10000yBP 以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

“The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a “best fit” compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results.”

### 測定方法などに関するデータ

**測定方法** AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる β-線計数法

**処理・調製・その他** : 試料の前処理、調製などの情報

**前処理** acid-alkali-acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄  
acid washes : 酸洗浄  
acid etch : 酸によるエッチング  
none : 未処理

**調製、その他**

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理

Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

**分析機関** BETA ANALYTIC INC.

4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155

試料データ	未補正14C年代(y BP) (measured radiocarbon age)	$\delta$ 13C(permil)	14C年代(y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta- 186222	5800 $\pm$ 40	-24.3	5810 $\pm$ 40
試料名 ( 23909) OI5-1			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material acid/alkali/acid		
Beta- 186223	5800 $\pm$ 50	-26.0	5780 $\pm$ 50
試料名 ( 23910) OI5-2			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material acid/alkali/acid		
Beta- 186224	6250 $\pm$ 50	-14.7	6420 $\pm$ 50
試料名 ( 23911) OI5-3			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material acid/alkali/acid		

表1  $^{14}\text{C}$ 年代測定結果

試料番号	試料種類	測定法	採取地点	採取層位	試料の状態	重量(乾:g)	推定年代
OI5-1	炭化材	AMS	基本土層	Ko-f直下	直接採取	0.64	5,700
OI5-2				Ko-f直下		0.09	5,700
OI5-3				Ko-g直下		0.03	6,000

表2  $^{14}\text{C}$ 年代測定試料一覧

# OI-1

(Variables: C13/C12=-24.3:lab. mult=1)

**Laboratory number: Beta-186222**

**Conventional radiocarbon age: 5810±40 BP**

**2 Sigma calibrated result: Cal BC 4740 to 4550 (Cal BP 6690 to 6500)  
(95% probability)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age

with calibration curve: Cal BC 4690 (Cal BP 6640)

**1 Sigma calibrated result: Cal BC 4710 to 4600 (Cal BP 6660 to 6560)  
(68% probability)**

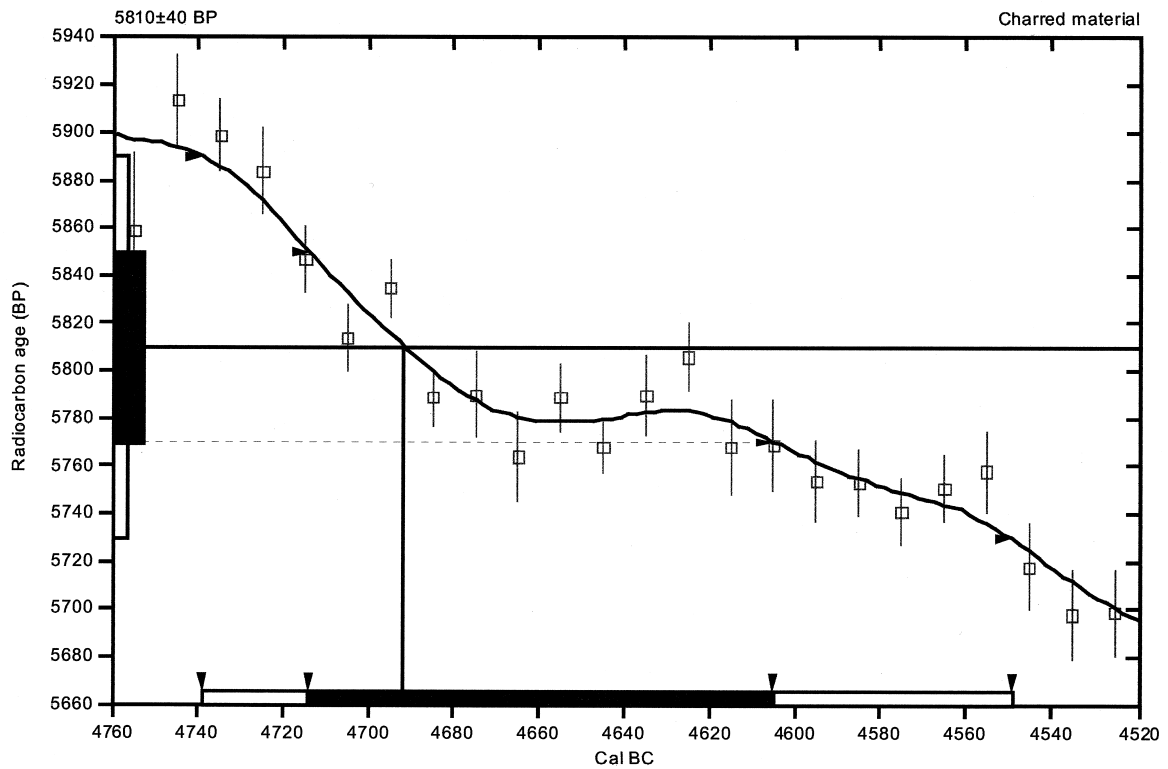


図1  $^{14}\text{C}$ 年代の暦年代較正(1)

# OI-2

(Variables: C13/C12=-26:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-186223**

Conventional radiocarbon age: **5780±50 BP**

2 Sigma calibrated result: **Cal BC 4730 to 4500 (Cal BP 6680 to 6450)**  
(95% probability)

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age

with calibration curve: Cal BC 4660 (Cal BP 6610) and  
Cal BC 4640 (Cal BP 6590) and  
Cal BC 4620 (Cal BP 6570)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 4700 to 4550 (Cal BP 6650 to 6500)  
(68% probability)

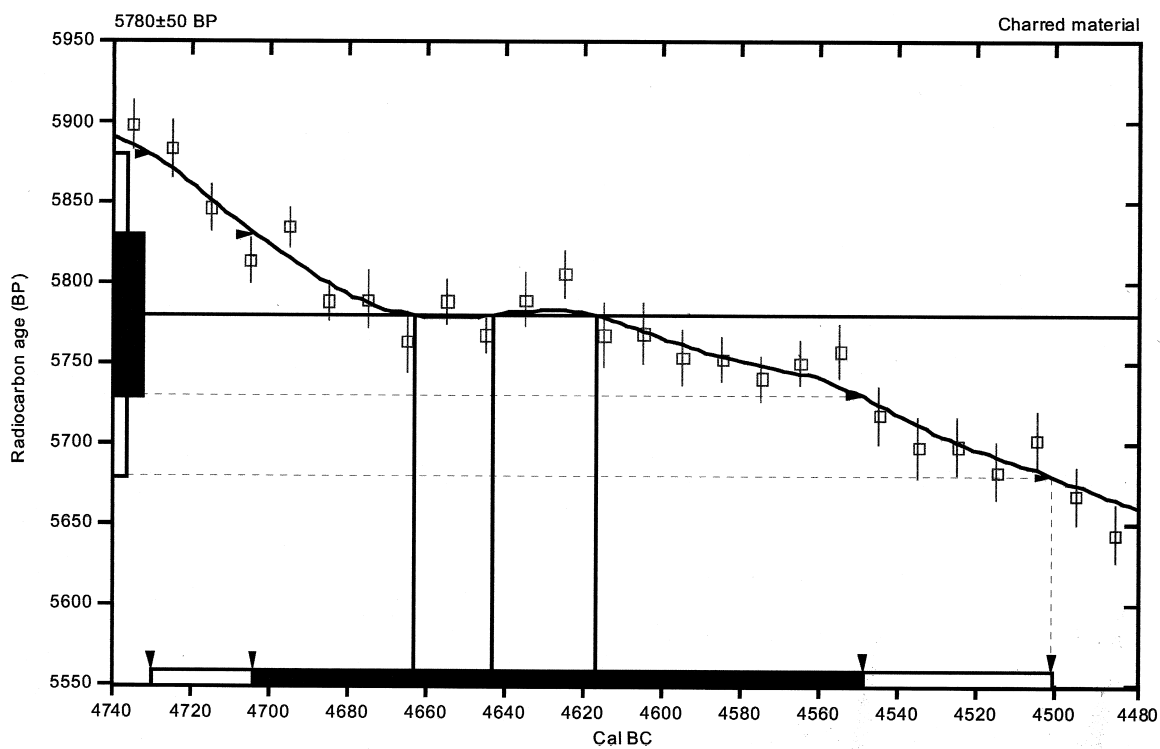


図2  $^{14}\text{C}$ 年代の暦年代較正(2)



# OI-3

(Variables: C13/C12=-14.7:lab. mult=1)

**Laboratory number: Beta-186224**

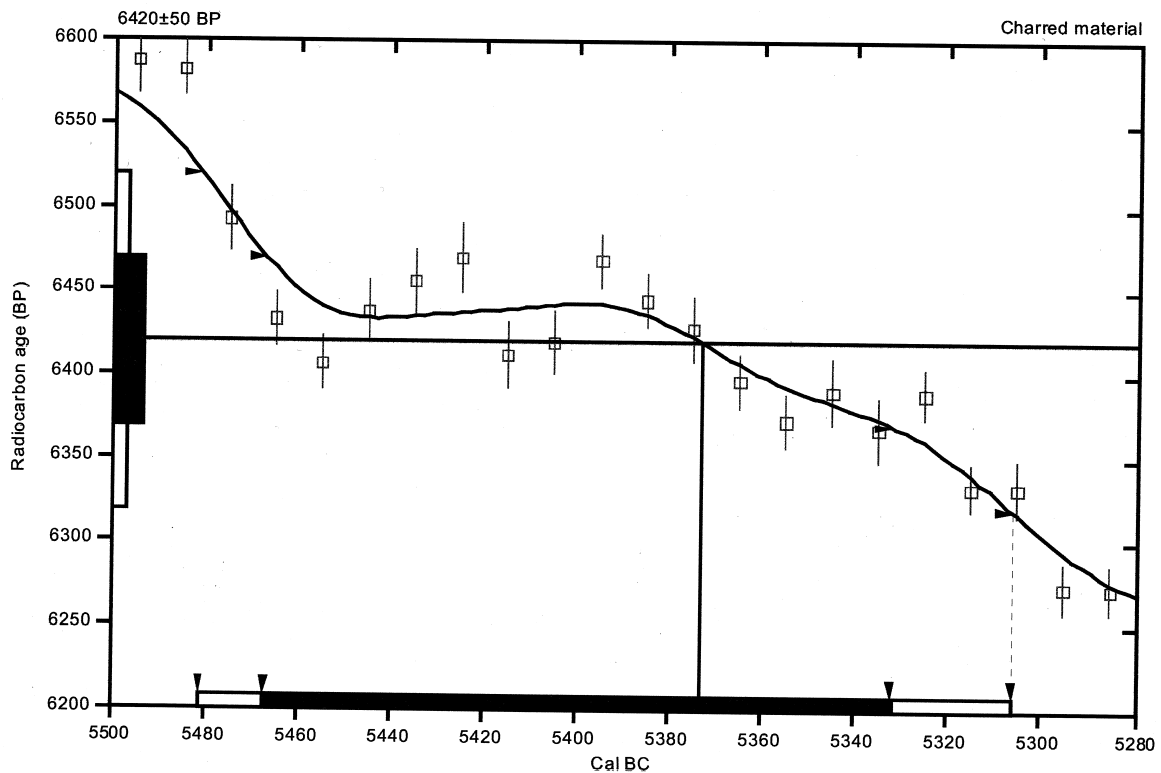
**Conventional radiocarbon age: 6420±50 BP**

**2 Sigma calibrated result: Cal BC 5480 to 5310 (Cal BP 7430 to 7260)  
(95% probability)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age  
with calibration curve: Cal BC 5370 (Cal BP 7320)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 5470 to 5330 (Cal BP 7420 to 7280)  
(68% probability)



References:

*Database used*

*Calibration Database*

*Editorial Comment*

*Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xiii*

*INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration*

*Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083*

*Mathematics*

*A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates*

*Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322*

図3 <sup>14</sup>C年代の暦年代較正(3)

図番号	図版番号	掲載番号	調査区	遺物名	分類	層位	遺物No.	点数	日付	備考
7	IV-2-1	1・2・3・4	k 106	a 土器	III群a類	VIb	43	11	2002.11.6	43はB調査で出土。同一個体。掲載番号4は胴部上半、掲載番号5は胴部下半。
			k 106	a 土器		VIb	46	80	2003.7.9	
		4・5・6	k 106	b 土器		VIa	41	4	2003.7.9	
			k 106	b 土器		VIb	44	5	2003.7.9	
			k 106	d 土器		VIb	45	3	2003.7.9	
7	IV-2-1	7・8	i 112	b 土器	VI群a類	VIa	39	20	2003.6.10	一個体。底部と口縁～胴部は接合せず
			k 106	a 土器	VI群a類	VIa	40	1	2003.7.9	口縁部
		9	g 106	a 土器	VI群a類	VIa	37	6	2003.6.10	37は胴部と底部、38は口縁部で、胴部と口縁部が接合。底部とも同一個体。
			g 106	a 土器	VI群a類	VIa	38	1	2003.6.24	
			l 107	a 土器	VI群a類	VIa	42	1		胴部

表 - 2 - 1 包含層出土土器一覧

図番号	図版番号	掲載番号	調査区	遺物名	分類	石材	層位	長さ	幅	厚さ	重量	遺物No.	点数	日付	備考	
8	IV-3-1	1	i 113	b 石器	石鏃	真岩	VIb	(22.4)	(16.8)	3.0	(0.7)	20	1	2003.6.10		
			k 110	a 石器	つまみ付きナイフ	真岩	X風倒木	62.3	17.5	4.7	5.8	33	1	2003.7.11		
			j 105	d 石器	削器	真岩	VIa	41.8	55.9	12.2	21.1	9	1	2003.5.30	腹面光沢	
			j 107	a 石器	削器	真岩	VIa	89.8	59.7	16.6	65.4	12	1	2003.6.2	腹面光沢	
			l 107	c 石器	削器	真岩	VIa	47.2	33.9	9.6	7.7	14	1	2003.5.26		
			l 112	a 石器	削器	真岩	VIb	83.5	40.5	7.6	20.5	22	1	2003.6.2	腹面光沢	
			j 117	b 石器	両面調整石器	真岩	Xa	(32.4)	(36.8)	10.0	(11.1)	28	1	2003.7.18		
			i 115	c 石器	Rフレイク	真岩	Xa	58.3	39.7	9.7	15.9	27	1	2003.7.16		
			l 116	c 石器	Rフレイク	真岩	VIa	47.6	45.5	11.8	23.1	19	1	2003.6.17		
			l 108	c 石器	Rフレイク	真岩	VIa	52.2	49.0	17.6	32.4	16	1	2003.5.27	微細剥離あり	
			l 115	b 石器	Rフレイク	真岩	不明	50.8	45.6	11.6	16.7	35	1	2002.4.9	B調査	
			9	IV-3-3	24	h 111	c 石器	剥片	安山岩	X I	64.2	24.6	7.8	13.0	36	1
i 110	d 石器	剥片				凝灰岩	VI	37.9	39.5	15.4	17.12	1	1	2003.6.10		
g 112	d 石器	剥片				真岩	VIa	45.9	35.4	18.8	18.19	2	1	2003.6.10	2～7接合	
g 112	d 石器	剥片				真岩	VIa	69.7	37.8	26.7	59.86	3	1	2003.6.10	2～7接合	
g 112	a 石器	剥片				真岩	VIa	59.4	35.9	17.1	29	4	1	2003.6.10	2～7接合	
g 112	a 石器	剥片				真岩	VIa	30.2	48.7	9.8	8.31	5	1	2003.6.10	2～7接合	
h 112	d 石器	剥片				真岩	VIa	53.1	71.6	21.5	60.28	8	1	2003.6.10		
i 113	a 石器	剥片				真岩(赤)	VIa	18.3	15.3	2.4	0.63	11	1	2003.6.10		
l 107	c 石器	剥片				真岩	VIa	22.4	22.6	3.7	1.15	15	1	2003.5.26		
h 113	c 石器	剥片				真岩	Xb	49.5	28.3	8.8	7.36	30	1	2003.6.10	トレンチ	
h 113	c 石器	剥片				真岩	Xb	67.6	65.5	17.9	64.75	31	1	2003.6.10	トレンチ	
8	IV-3-1	13				h 111	c 石器	石核	真岩	Xb	57.0	85.5	38.5	121.3	29	1
			IV-3-2・3	g 112	a 石器	石核	真岩	VIa	96.7	95.3	38.5	331.4	7	1	2003.6.10	2～7接合
				g 112	a 石器	石核	真岩	VIa	76.3	42.5	29.3	78.6	6	1	2003.6.10	2～7接合
9	IV-3-2	16	i 114	a 石器	磨製石斧	蛇紋岩	Xb	(81.0)	33.0	8.8	(34.6)	32	1	2003.7.11		
			j 107	a 石器	たたき石	安山岩	VIa	69.3	52.3	36.5	152.4	13	1	2003.6.2		
			l 108	d 石器	たたき石	安山岩	VIa	(75.0)	50.3	43.9	(179.9)	17	1	2003.5.27		
			j 113	d 石器	たたき石	安山岩	X	51.0	54.0	43.2	133.0	25	1	2003.6.12		
			i 110	d 石器	たたき石	安山岩	VIa	81.9	59.3	56.7	260	10	1	2003.6.10		
9	IV-3-2	20	位置不明	石器	すり石	安山岩	X	68.0	117.0	58.0	555.9	26	1		三角すり石	
			j 111	c 石器	すり石	安山岩	X	59.0	66.0	26.0	153.3	24	1	2003.6.12		
			j 107	a 石器	すり石	安山岩	VIb	58.9	57.0	44.5	193.2	21	1	2003.6.24		
9	IV-3-2	23	l 109	c 石器	すり石	安山岩	VIa	67.7	51.7	39.5	180	18	1	2003.5.27		
			g 104	d 石器	台石	安山岩	不明	213.0	156.0	55.0	2680.0	34	1	2002.4.9	B調査	

表 - 3 - 1 包含層出土石器一覧

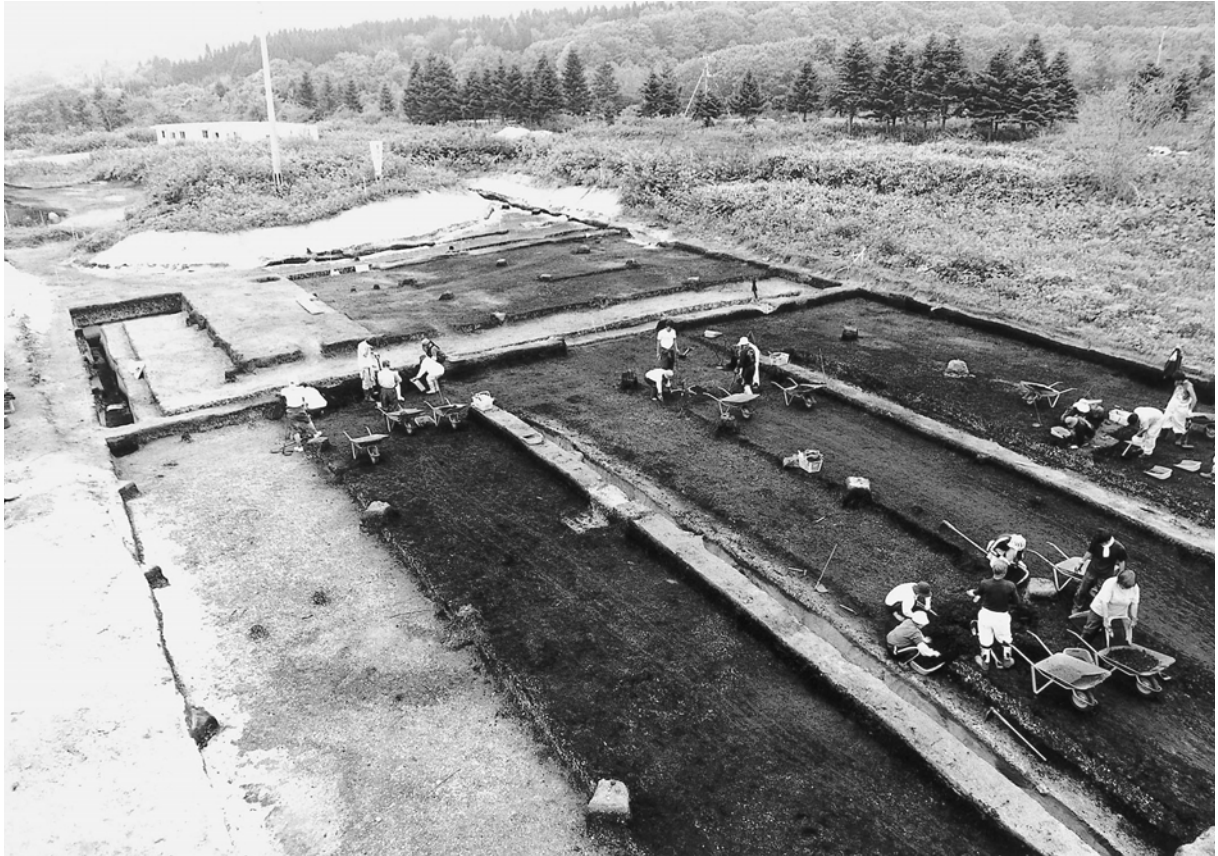
遺物No.	調査区	遺物名	石材	層位	点数	日付	遺物No.	調査区	遺物名	石材	層位	点数	日付
47	j 113	b 礫	安山岩	VI	1	2003.6.11	66	h 110	b 礫	安山岩	VI	1	2003.6.10
48	i 113	a 礫	凝灰岩	VI	1	2003.6.10	67	k 113	d 礫	安山岩	VI	1	2003.6.12
49	l 109	a 礫	安山岩	VII上面	1	2003.6.2	68	k 113	d 礫	安山岩	VI	1	2003.6.12
50	i 113	d 礫	安山岩	VI	1	2003.6.10	69	g 106	d 礫	安山岩	VI	1	2003.6.10
51	l 108	c 礫	安山岩	VI	1	2003.5.27	70	g 112	d 礫	安山岩	VI	1	2003.6.10
52	j 110	b 礫	安山岩	VI	1	2003.6.10	71	l 109	a 礫	安山岩	VIa	1	2003.6.2
53	j 110	b 礫	安山岩	VI	1	2003.6.10	72	l 109	a 礫	安山岩	VIb	1	2003.6.2
54	k 113	d 礫	安山岩	VI	1	2003.6.12	73	j 105	d 礫	安山岩	VIa	1	2003.5.30
55	k 113	d 礫	安山岩	VI	1	2003.6.12	74	g 107	d 礫	安山岩	VI	1	2003.6.10
56	i 106	a 礫	安山岩	VI	1	2003.6.10	75	g 107	d 礫	安山岩	VI	1	2003.6.10
57	j 107	a 礫	安山岩	VIb	1	2003.6.2	76	i 110	d 礫	安山岩	VI	1	2003.6.10
58	j 107	a 礫	安山岩	VIb	1	2003.6.2	77	g 115	a 礫	安山岩	VI	1	2003.6.11
59	j 107	a 礫	安山岩	VIb	1	2003.6.2	78	i 106	a 礫	安山岩	VIa	1	2003.6.24
60	i 109	a 礫	安山岩	VI	1	2003.6.2	79	i 106	a 礫	安山岩	VIa	1	2003.6.24
61	i 107	b 礫	安山岩	VI	1	2003.6.10	80	g 111	d 礫	安山岩	VI	1	2003.6.10
62	k 106	a 礫	安山岩	VIa	1	2003.7.9	81	l 110	礫	安山岩	VIa	1	2003.6.12
63	k 106	a 礫	安山岩	VIa	1	2003.7.9	82	l 112	a 礫	安山岩	VII上面	1	2003.6.2
64	k 106	b 礫	安山岩	VIb	1	2003.7.9	84	k 108	c 礫	安山岩	VIb	1	2003.7.22
65	k 106	c 礫	安山岩	VIa	1	2003.7.9	85	l 110	a 礫	安山岩	VI	1	2003.6.16
							86	l 105	d 礫	凝灰岩?	VI	1	2003.7.16

表 - 3 - 2 包含層出土礫一覧

## 引用参考文献

- 朝日新聞社 (1997) 『三内丸山遺跡と北の縄文世界』アサヒグラフ別冊
- 奥野充・吉本充宏・荒井健一・中村俊夫・宇井忠英・和田恵治 (1999) 「北海道駒ヶ岳火山、Ko-fテフラの加速器<sup>14</sup>C年代」『地質学雑誌』第105巻第5号
- 勝井義雄 (1985) 「駒ヶ岳の火山活動史とテフラ」『続北海道5万年史』郷土と科学編集委員会
- 鷹沢好博 (1993) 「八木A遺跡火山灰調査報告」『八木A遺跡・ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 小山正忠・竹原秀雄 (2002) 『新版標準土色帖』24版 日本色研事業株式会社
- 佐々木竜男・片山雅弘・富岡悦郎・佐々木清一・矢沢正士・山田忍・矢野義治・北川芳男 (1971) 「北海道における腐植質火山灰の編年に関する研究」『第四紀研究』第10巻第3号
- 砂原町 (1990) 『砂原町史』第1巻
- 鹿部町史編集室編 (1994) 『鹿部町史』鹿部町
- 田中克人・根本直樹 (1998) 「朝鮮民主主義人民共和国、白頭山の埋没樹幹の14C年代」『1998年地球惑星科学関連学会合同大会予稿集』
- 竹内理三編 (1987) 『角川日本地名辞典1 北海道 上巻』角川書店
- 椴法華町 (1989) 『椴法華村史』
- 永井秀夫監修 (2003) 『日本歴史地名体系第1巻 北海道の地名』平凡社
- 日本ペドロロジー学会編 (2000) 『土壌調査ハンドブック改訂版』博友社
- 花岡正光 (1995) 「八木A遺跡とハマナス野遺跡のテフラ層序」『八木A遺跡・ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 早川由紀夫・小山真人 (1998) 「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日」『火山』第43巻第5号
- 福田裕二 (2002) 「縄文時代における自然災害雑考」『南北海道考古学情報』第10号 南北海道考古学情報交換会会誌
- 北海道開拓記念館 (1980) 『熊野喜蔵氏資料目録』
- 北海道新聞社編 (1998) 『北の縄文 南茅部と道南の遺跡』
- 町田洋・新井房夫 (2003) 『新編 火山灰アトラス』東京大学出版会
- 南茅部町教育委員会 (1972) 『北海道南茅部町の先史』
- 南茅部町 (1987) 『南茅部町史』上巻
- 柳井清治・鷹沢好博・古森康晴 (1992) 「最終氷期末期に噴出した濁川テフラの層序と分布」『地質学雑誌』第98巻第2号

# 写真図版



1. 調査区全景（北から）



2. 調査区全景（北西から）



図版 2



1. 調査区全景（北西から）



2. 調査風景（西から）



1 . 遺物出土状況 (西から)



2 . 遺物出土状況 (南西から)



3 . G109~ L109 トレンチ (南から)



4 . K111~ R111 トレンチ (南から)

図版 4



1 . H113 土層断面 (南西から)



2 . J113 土層断面 (南西から)



3 . K105 土層断面 (南東から)





1 . 調査風景 (北東から)



2 . X層検出状況 (北東から)



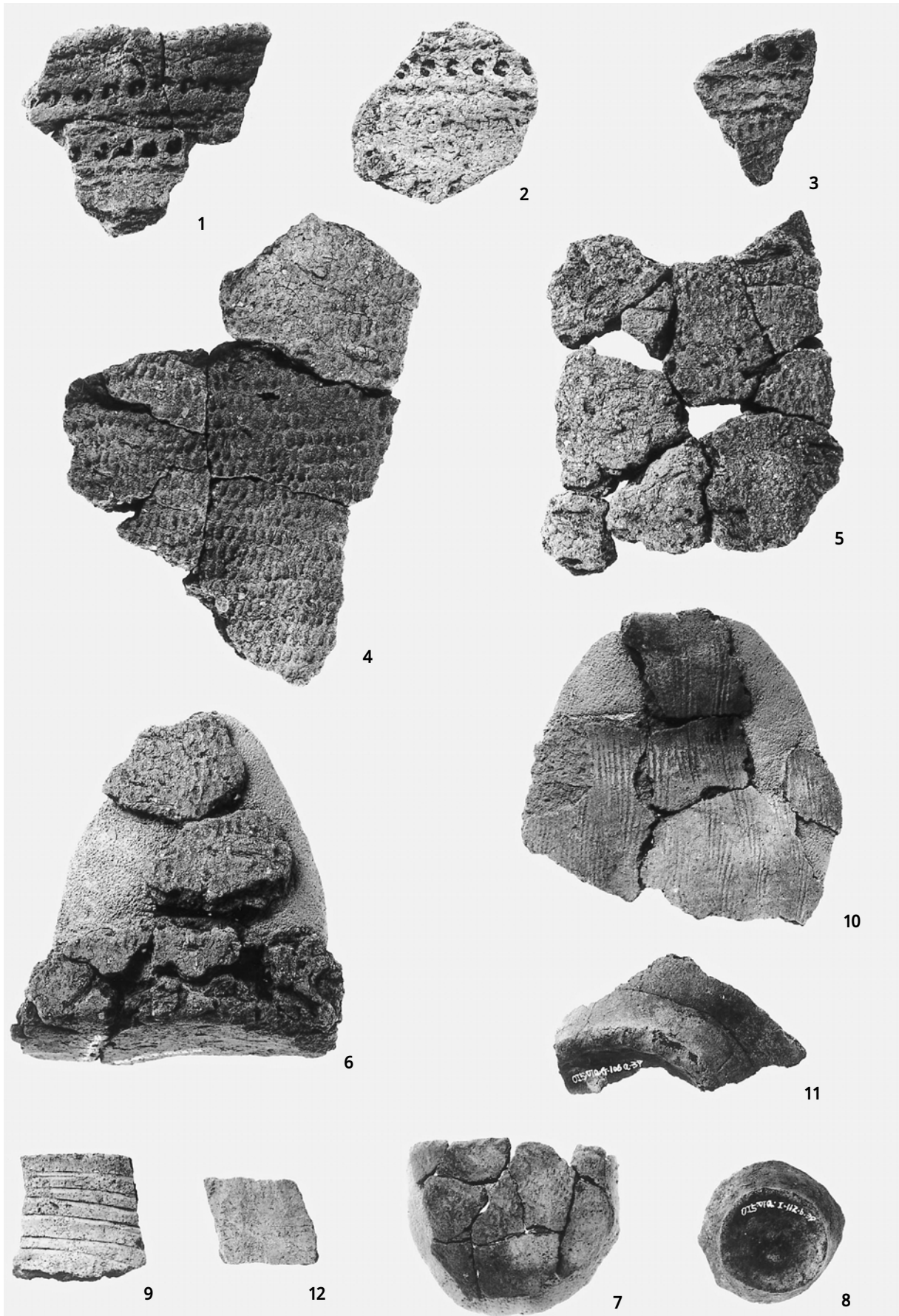
3 . X層礫出土状況 (北西から)



4 . X層遺物出土状況 (北東から)

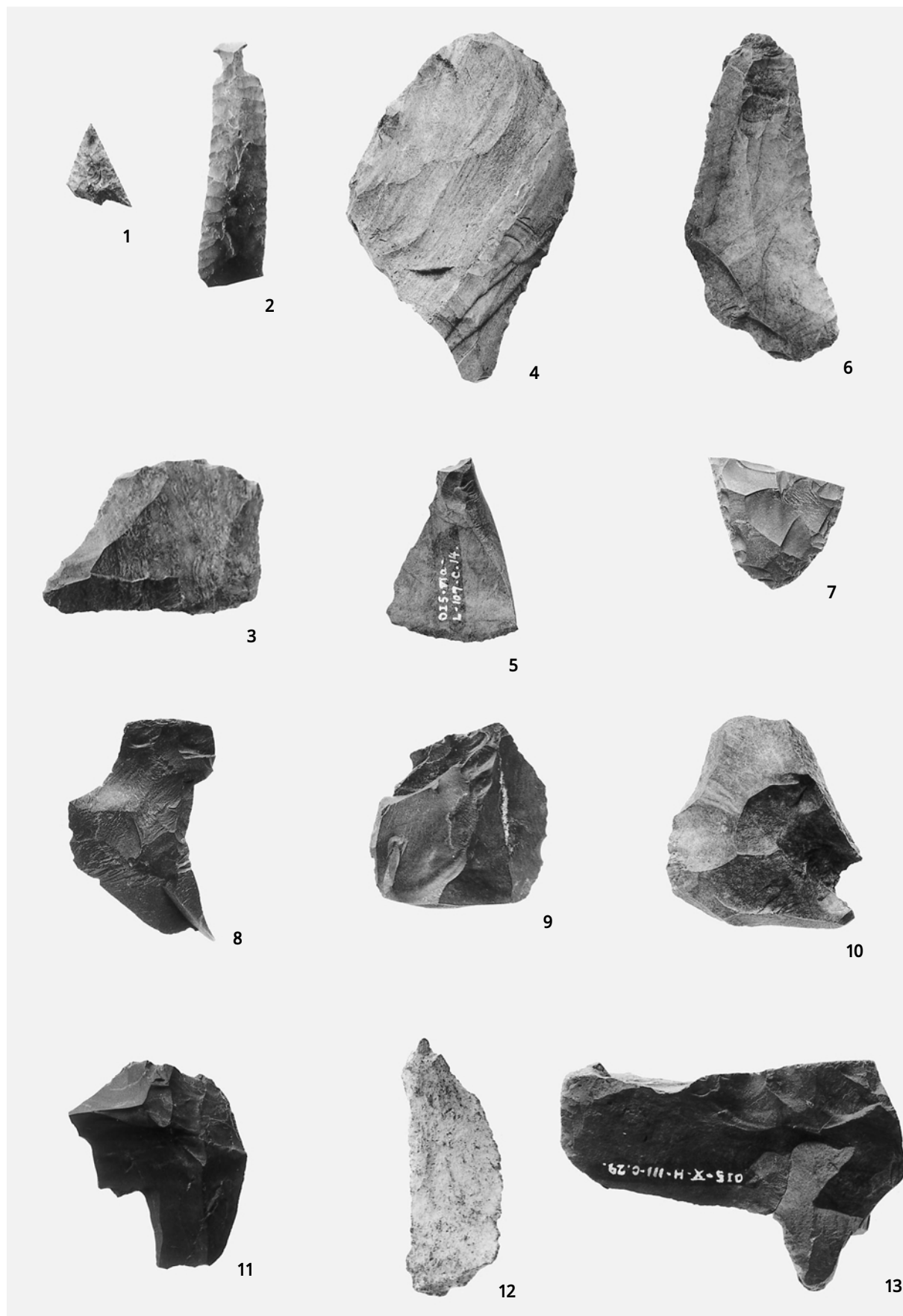


1. 遺跡完掘（北西から）

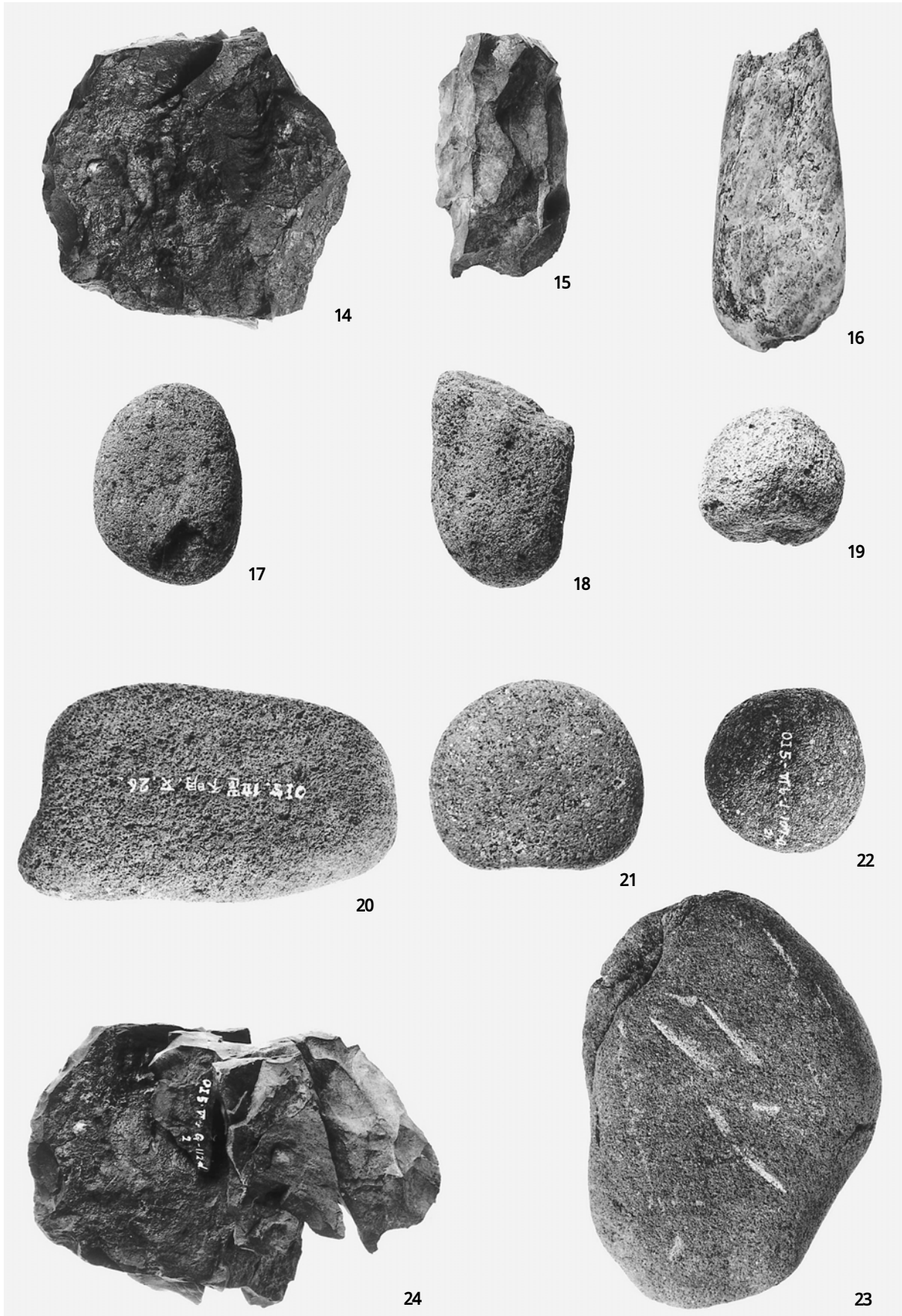


1. 包含層出土の土器





1. 包含層出土の石器(1)



1. 包含層出土の石器(2)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しかべちょう おおいわ5いせき							
書名	鹿部町 大岩5遺跡							
副書名	一般国道278号鹿部道路(鹿部バイパス)工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第201集							
編著者名	福井 淳一							
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター (http://www.domaibun.or.jp)							
所在地	〒069 0832 北海道江別市西野幌685番地1 (011) 386 3231 mail@domaibun.or.jp							
発行年月日	西暦2004年3月17日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 東経 (G 101杭)	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号					
おおいわ5いせき 大岩5遺跡	ほっかいどうかやべくんしかべちょう 北海道茅部郡鹿部町  あざおおいわ 字大岩107 18~20ほか	01343	B 13  6	旧日本測地系		20030506 ~ 20030725	1,800㎡	道路建設 (一般国道278号鹿部道路(鹿部バイパス)工事)に伴う事前調査
				42° 01' 03.1066	140° 50' 47.1876			
				世界測地系				
				42° 01' 12.26634	140° 50' 34.27663			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
大岩5遺跡	散布地	縄文時代早期 前期 続縄文時代			土器 (円筒下層d式、 恵山式) 石器			

---

---

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第201集

しかべ おおいわ  
鹿部町 大岩5遺跡

一般国道278号鹿部道路（鹿部バイパス）工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 平成16年3月17日

編集 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069 0832 江別市西野幌685番地1

Tel 011 386 3231 Fax 011 386 3238

[ E mail ] mail@domaibun.or.jp

[ URL ] <http://www.domaibun.or.jp>

印刷 三浦印刷株式会社

〒064 0809 札幌市中央区南9条西6丁目

Tel 011 511 6191

---

---